

42391

教科書文庫

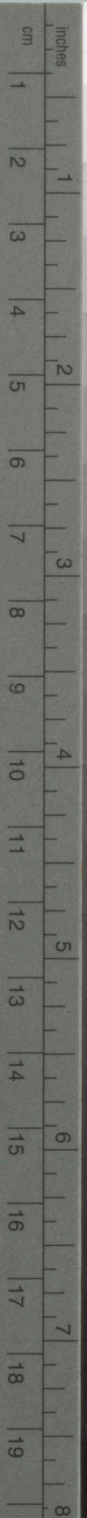
4
810
42-1938
20000 44028

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



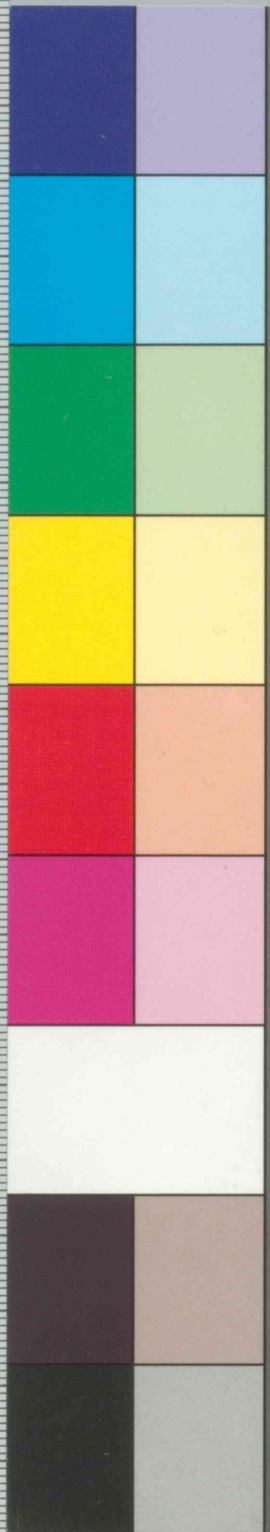
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

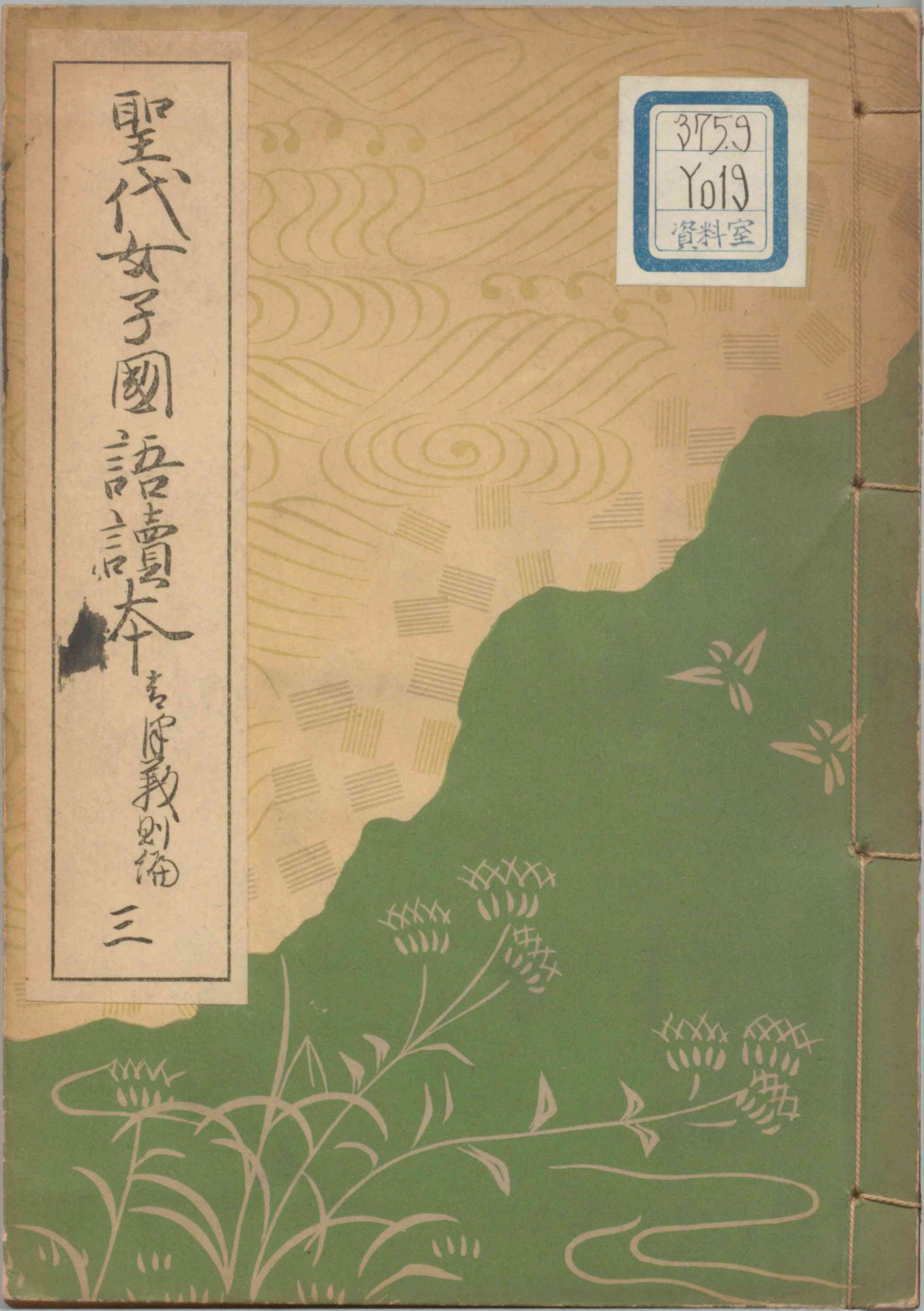


375.9
Y019
資料室

聖代女子國語讀本

吉野我則編

三



日七十月一年三十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學女等高
用科語國校學業實

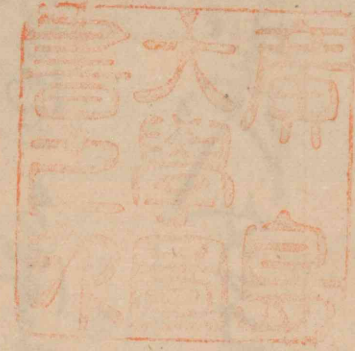
資 料 室

375.9
Y019

文學博士 吉澤教則編

聖代女子國語讀本

早稲書店刊



昭憲皇太后御款

みづすくましかみも

せむ

学ひのほりかきくわあ

あし

義則謹書

昭憲皇太后御歌

みがかずば玉もかゝみもなにか
せむ

學びの道もかくこそあり
けれ

義則謹書

聖代女子國語讀本 卷三 目次

一	さわやかな心	河野省三
二	天孫降臨	渡邊霞亭三
三	美しい日本(詩)	山村暮鳥六
四	千里の春	大和田建樹三
五	「マス」ことば	芳賀矢一元
六	若葉の雨	薄田泣菫三
七	峠の茶屋	夏目漱石四
八	一樹の蔭	海上龍子四
九	山の感觸	黒田初子四

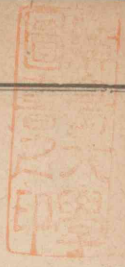
目

次

一〇 歌	心	湯淺常山 三
一一 緋	緋 (短歌)	(諸家) 七
一二 南京の壺	柴田鳩翁 三	
一三 皇天の加護	小笠原長生 六	
一四 二重橋のほとり	沼波瓊音 七	
一五 母と子	今井邦子 九	
一六 言葉の變遷	佐々醒雪 一〇	
一七 山の歡喜(詩)	河井醉茗 二六	
一八 滿蒙の四季	上田恭輔 二八	
一九 今	市島春城 二九	
二〇 戰爭と天候	藤原咲平 三六	

二一 蘭學事始	菊池寬 一四
二二 勝重と其の妻	新井白石 二五
二三 散亂心	幸田露伴 二五
二四 山陽の感激	南條文雄 二六
二五 眞の偉人	高須芳次郎 二七
二六 國歌と國民性	田邊尙雄 二七

—(目次終)—



聖代女子國語讀本 卷三

一 さわやかな心

河野省三

河野省三
國學者、文學博士、
國學院大學長、埼玉
縣の人、明治十五年
生。

○崇高

○みやびやか

○活動的

私どもは、晴れた日に、東海の天に聳える富士山の姿を
仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるので
あります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然
に晴れくしたみやびやかな氣分になるのであります。
日の丸の旗がひらくと翻つてゐるのを見ますと、そこ
に活動的な生きくとした氣分が起つてくるのであり

一 さわやかな心

一

○清淨
吸ひ。

○すがくしい
包まれる

ます。或は又かの明治神宮に参拜いたしまして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をくゞり、清淨な参道を吸ひこまれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿前に参りますと、おのづからすがくしい尊い氣分に包まれて來ますし、更にまた松の緑の滴るお濠の前に立ちまして、わが皇室の御隆盛を思ひますと、何ともいへぬ神聖な氣分が現れてくるのであります。

これ等の神々しくすがくしく、晴れくしい心持こそ、實に我々日本人が、遠いく昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育て上げて來た純眞な心は、全くわが國民性の本質でありまして、い

○眞髓

○美化する

○まほし

○取りも直さず
○外ならない

はゆる大和魂の眞髓であります。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち満ちた心が、即ちほんたうの眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとくさわやかに

もたまほしきは心なりけり

と、お詠みあそばされてありますが、このさわやかな心こそ、取りも直さず、かやうな純眞な氣分に外ならないのであります。私どもが、この世に於いて、毎日々々の生活を

○屈託する

營むに當りましても、最も大切な氣分であり、かつ價值のある態度は誠にこのさわやかな心であります。このさわやかな心は、晴れくしい廣い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、また妄りに他を排斥しない、穩かな心であります。この心からして、かたよらない、さわやかな氣分を味はふ事ができるのであります。

味はふ

さわやかな心は、明快な、裏表のない心持であります。

溫味のある生きくとした生活が、最も望ましい世の中であり、あります。偽らない正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命もまたこゝにあると信じますが、

○天真爛漫

天真爛漫は、即ちさわやかな心の本體であります。

さわやかな心は、かく清らかで溫味のある生きくとした心持であり、まして、建設的に、有意義に、すべてのものを生かして行くところの積極的精神であります。いはゆる「朝日の豊榮昇る」氣分が即ちこのさわやかな心の働であります。

○積極的精神

○いはゆる

○豊榮昇る

○根柢

私たち日本人は、かういふさわやかな心を根柢といたしまして、この尊い國體を築き上げ、この立派な國民道徳を形づくつて來たのであります。わが日本人の國民精神の現れである神道は、即ちこのさわやかな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道に就いては、

○畢竟は
○純眞
○傳統的信念

いろの説がありますが、畢竟はこのさわやかな心、純眞な氣分に生きるところの日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。

○看破する
○風靡する
松坂
三重縣松坂市。
本居宣長
國學者、鈴の屋と號
した、享和元年(二四
六)歿、年七十二。

この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五十年前に、伊勢國松坂にあつて、當時の學界を風靡した、本邦空前の大學者本居宣長であります。この宣長の詠んだ有名な歌に、

數島のやまと心を人間はば

あさひに匂ふ山ざくら花

○まさしく
たゞへる

といふのがありますが、この大和心もまさしくこのさわやかな心の姿をたゞへたものであります。宣長は全生

○ひたすらに
○主張する

命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力し、ひたすらに、わが國家を愛する道を力強く主張した人であります。

○毒々しい

朝日に匂ふ山櫻花は、いかにも清らかであり、さうして單純にさつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふ所のない、清いみやびな姿であります。そこに

かういふ

○明き淨き正しき直
き心

私ども日本人としての心の特長が現れてゐるのであります。私たち日本人の祖先は、かういふ心持を、明き、淨き、正しき、直き心とも申しまして、道德の根柢となる心はここにありと信じてをつたのであります。

○本質

かゝるさわやかな大和心を本質とする神道は、たゞこ

○一途に

○人性の自然

○經典

○簡素

のみやびな心を心として、一途にわが皇室を尊び、わが國家を愛したのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存してゐる事は、明らかであります。神社はわが神道を形に生かした經典でありまして、かの鳥居といひ鎮守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆清淨簡素といふ事を尙んでゐます。そこにお参りいたしますと、私たちの心は、おのづからすがすがしい、爽やかな氣分になつてしまふのであります。殊に五十鈴川の清い流に、二千年の昔から鎮坐します皇大神宮に詣でますと、何人も西行法師と同じやうに、「なにごとのおはしますか、は知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」といふ感じに打た

西行法師
俗名佐藤義清、鎌倉
初期の歌人、建久元
年(八五〇)寂、年七十
三。

○情操

○がな

○拜誦する

○因む
○挿話

れるのであります。この何とはなしに感ぜられる尊い心こそ、即ち日本人の神に對するありのままの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも

淺みどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

といふのがありますが、この氣分を持つてゐるのが、大切な心がけてあります。この御製を拜誦しますと、いかにも清らかにさわやかな大御心をしのび奉らざるを得ないのであります。思へば、もう十三年の昔になります。私は明治天皇に因み奉る一つの挿話を持つてをります。

行はれる

伏見桃山
京都市伏見區、明治
天皇、昭憲皇太后の
御陵のある地。
○老幼男女
○遙拜する



それは明治天皇の御一年祭の行はれた時の事でした。或小さい田舎町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向かつて祭壇を設け、程よく隔つた所に並びました老幼男女は、その町長を首めとして、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。その式に遅れた町民たちは、いづれも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳ぐらゐの八百屋さんがありました。つゝましかに祭壇の前に立つて伏拜しましたが、やがて徐ろに、左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑しやうがを取出しまして、丁寧ていねいに祭壇に捧げて置いて、一步退いて一禮して立去

○目撃する

○涙ぐましい感

○眞價を發揮する

つたのであります。これを目撃しました私は、誠に涙ぐましい感に打たれたのであります。皆さん、私たち日本人の心の底には、かういふ飾氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゞへられてゐるのであります。私たちはこの心を日々の生活に移しまして、物を清らかにし、心をさわやかにして、偽らない力強い社會を築いて行きたいものであります。私はこのさわやかな心を基礎とした生活を、常に、快活にして眞面目なる態度と申してをりますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活で眞面目な所に、一番よく眞價を發揮するものがあると信じます。

(ラヂオ講演集)

渡邊霞亭

小説家、本名は勝、名古屋市の人、大正十五年歿、年六十二。

二 天孫降臨

渡邊霞亭

○供奉

○面々

○雰圍氣

焦すやうに

○舟出する

覆ふ。

○謹嚴

○玉座

天孫降臨の御準備は既に成つた。供奉の面々は何れも緊張した心持で、莊嚴な雰圍氣の中に浸つてゐた。天はまだ明けきつてゐない。御門、御門に焚くかゞり火は、闇を焦すやうに照らして、それが空高く昇るほど、末廣く擴がつて行く。今日、天の御子がこの都を舟出し給ふよき日を祝福する様な彩が、やがて全世界を覆ふのであるやうに、地下の人々は歡聲を揚げてゐた。

謹嚴の氣、莊重の氣、靜肅の氣が宮居の周圍を鎖して、深く重い氣持が玉座の中にたな引く時、天孫瓊杵尊は近

侍の神に案内されて、天照大神の御前へ出でさせられた。

警蹕の聲が琴の音、笛の音、太鼓の音に和して、御帳が徐に

あがると、さながら朝日の出でますのを拜むやうな陸離

たる光彩がそこに動いて、貴い神敕が金鈴の鳴るが如く

に響いた。

〔豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は是れ吾が子孫の王た

るべき地なり〕

そよとの音も聞えず、天地のある限り嚴肅の氣に満た

された間を、この御聲は玲瓏と響きわたつた。それは高

い高い旻天の上をも貫くべく、厚いく大地の底をも貫

くべき、透き徹つた御聲であつた。

○警蹕
○帳
○さながら
○陸離たる光彩

○知らしめす

○玲瓏

○旻天

○緊張する

○一齊に

瓊瓊杵尊は緊張した御氣持のうち、その神敕を受けさせられた。それをもれ承つた群神たちは、晴れわたつた大空に日の神の出現を見た如くに、一齊に頭を垂れて、感激の涙に咽せ返つた。

○莊嚴

○みことのらす

「豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。——あゝ、何といふ莊嚴な神敕であらう。そしてその神敕はさやうに簡単なものではあるが、御意味は全く大きい。吾が子孫の王たるべき地——吾が子孫の王たるべき地——王たるべき地とみことのらせ、たその神敕の中には、眞に有難い大御心が籠つてゐる。

○悠久
○萬古易りない

このやうな有難い神敕を本にして、統治の任に就かせ給ふ皇孫の御末は、眞に天地の久しきに比べる事が出来るであらう。いや、たとひ天地は覆る事があつても、日が悠久に、月が永遠に萬古易りのない光をもつやうに、光り輝くであらう。何といふおめでたい事であらう。」

○瞳々

かうした聲が都の内外に満ちわたる頃、我が日本の魂とも見るべき朝の日輪は、瞳々として東の山の端から昇り始めたのであつた。

(物語日本史)

山村暮鳥
詩人、本名は土田八
九十、群馬縣の人、
大正十三年歿、年四
十一。

三 美しい日本

山村 暮鳥

日本。うつくしい國だ。

葦の葉つばの朝露がぼたりと

おちてこぼれてひとしづく、

それがこの國となつたのだとでも

言ひたいやうな日本。

大海のうへに浮いてゐる

かはいらしい日本。

うつくしい日本。

浮いて

小さな國だ。

小さいけれど、

その強さは鋼鐵はがねのやうな精神である。

おゝ日本。

びち／＼してゐる魚のやうな國。

勇敢な日本。

古い日本。

その霧深い中にとちこもつて、

山鳥の尾のなが／＼しい夢を見てゐたのも、

○山鳥の尾の

今はもうむかしのことだ。
目をあけて、

そこにどんな世界をお前は見たか。

日本、日本。

お前のことをおもふと、

この胸が一ぱいになる。

お前は希望にかゝやいてゐる。

お前は力にみちくゝてゐる。

そして眞劍だ。

○平坦

絶えず

だが日本よ、

お前の道はこれまでのやうに

もうあんな平坦なものではあるまい。

お前はよるひる絶えず

お前のまはりに打寄せてゐる

その波の音をなるときいてゐるか。

寂しくないか、

おゝ孤獨な

遠い一つ星のやうな日本。

からりとはれた黎明の天空のやうな國。

○黎明

ときくは通雲の
さつとかゝるくらゐのことはあつても、
お前はたゞの一度でも、
その顔面に泥をぬられたことがないんだ。
そんな美しい國なんだ。

日本。

幸福な日本。

強い日本。

わたしはこゝで生まれたんだ。

生まれた

○墳墓の地

またこゝで最後の息をひきとつて、
遠祖らと一緒になるんだ。

墳墓の地だ。

静かな國日本。

小さい國日本。

つよくあれ、

すこやかであれ、

奢るな、

日本よ眞實であれ、
ばかにされるな。

○奢る

大和田建樹
國學者、新體詩人、愛媛縣の人、明治四十三年歿、年五十四。

浮かべ

四千里の春

大和田建樹

春晴千里、山また山水また水、近き水は澄みて山の緑を浮かべ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。此の間に一線を引き行くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫しいだすは、歌か、詩か、抑、畫か。

七砲臺邊、波穩かにして、高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に飜るに似たり。帆を半ば張りて出で行く舟あり、櫓を操りて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて探れども見えぬ。松青き處、彩り添ふるに桃の紅なるを以て



七砲臺
品川の臺場。

〇謝す

す。自然は此の美を贈りて旅客を慰め、詩人は彼の美を

詠じて春に謝せんとす。

藤澤の野、山北の谷、人毎に唯美しと叫ぶ。



名古屋城

三保の松原、煙りわたりて、春は畫の如し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮き立つ雲、何もか造化の妙技に漏れん。近き舟は逝けども、遠き帆は動かんともせず。杳として認められたる

は、伊豆なるべし。富士山は水彩畫の如くにして、窓の右

〇造化の妙技

〇杳

〇水彩畫

四條畫
四條派の畫、圓山應
舉の門人松村吳春が
此の派を開いた。

○墨がき
こそ……なれ。

御室
仁和寺のこと。

より見下す人、舞臺の下より咲き誇る花、恰も一幅の四條
畫を展べたるが如きに、姥は此の
間に立ちて、蕨餅召せなど呼ぶ。
暫し休みて、眺めわたせば、淺黄に、
藍に、霞みわたれる八幡山崎のあ
たりも面白きに、東寺の塔を松の
木の間に墨がきにせる筆こそは
殊に巧なれ。

西山の花みる人は多く先づ御
室を指す。松青く樓門赤く、茶煙
絶えく揚りて花極めて白し。塔は霞をもれて松風の



寺 水 清



[筆 儒 麥 田 土]

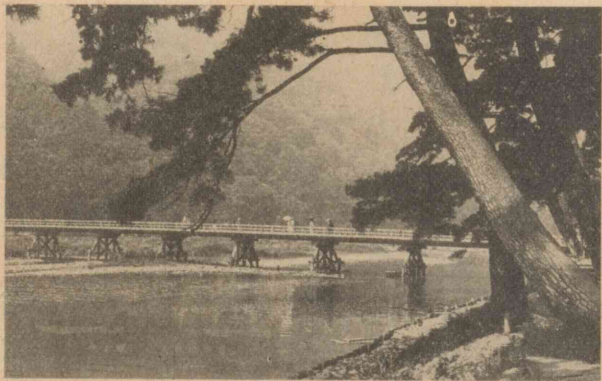
女 原 大

○香雲
○誦經
嵐山附近



○點綴す
○閑

柳櫻を云々
見渡せば柳櫻をこき
まぜて都ぞ春のにし
きなりける(古今集)



嵐山

外に聳え鐘樓は昔を説きて香雲の中に包まる。誦經の

聲遠く響きて鶯の聲長へに高き
梢にあり。

重なる岩根を踏みしめて生ひ
立つ松、其の間を點綴して咲きほ
これる花、嵐山の春こそは今閑な
れ。小舟に乗りて漕ぎゆく人あ
り。岸の此方にて眺むる人あり。
一條の渡月橋は錦の袂を載せて
此の大堰川を横ぎれり。坂を登
りて大悲閣に至れば、眼下に展げらるゝ一幅の圖、柳櫻を

西陣 京都西陣で織り出す織物で西陣織の義。廣隆寺 太秦にある眞言宗の寺。

○暮色 繞る 襲ふ

○寂寞

こき交ぜて、恰も西陣を織り出せる如く、又友禪を染めなせるが如し。途に、太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて春ものさびし。茶店あれども、客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は仁王門に紙礫を打ちつけて去る。

暮色は東山を籠め、叡山を繞りてやうく、鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の跡も姿を隠しぬ。紫に紅に藍に墨に見るく、彩られゆく山影、淡く濃く青く黒く消されゆく人影、いづれも詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞、顧みれば、西山もなく、北山もあらず。

(雪月花)

芳賀矢一

國文學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、國學院大學長、帝國學士院會員、福井縣の人、昭和二年薨、年六十一。

○女流

○御尤も

五「マス」ことば

芳賀 矢一

この頃の新聞に或女流の意見として、國語の敬語を廢したいといふやうな論があつた。さうしてそれには又、他の女流の賛成もあつたやうである。これは一寸聞くと御尤もな點もあるが、それは途中で逢つても、面倒臭いからお辭儀をするのもよさうといふのと同論で、黙つては居られないことかと思ふ。

建國の昔から、君臣の別が定つてゐる我が國、又家長が家族の中心となつて居る我が家庭では、昔から敬語が存在したのである。上下貴賤の階級が愈々繁くなつて來て

○上下貴賤

○繁多

失ふ。

から、敬語の種類も愈多くなつたのであつた。今日の時勢になつては、あまり繁多な敬語はだん／＼廢するもよからうが、普通語と敬語との二筋は、國體上から見ても、社會上から見ても、是非とも保存され、發達させねばならぬものであらうと思ふ。日本語の一大特色を失ふことは國體の上にも影響を及すものと考へなければならぬ。私は先日國學院の近所を通つたが、そこは水道鐵管の据附工事で、非常に道が悪かつた。働いてゐた人々が聲をかけて、「そこはあぶないぞ」「もつと右へ行け」「そちらへ行くと鐵管があるぞ」などと口々に注意してくれた。私はその親切を喜んだと同時に、そのことばに全く

○固より

○期待する

○紳士體

敬語の無いのに驚いた。さうして數年前までは、かういふ言葉遣は聞かなかつたと思つた。私は固より私に對しての敬語を期待したのではない。併し、従前ならばさうした人たちでも紳士體の者に對しては、「右へおいでなさい」「そつちへ行くと鐵管がありますよ」位のことと言つたものである。近來はそれが全く反對になつて、洋服でも一つ着て居るやうな者に向かつては、わざと敬語を使はないことになつたらしい。これは肉體の力で働いて居つても同等な人間だといふ考、又寧ろ神聖な労働者だといふ誇等から起つた現象だらうと思ふ。こんな事で敬語の失はれて行くことは残念である。國民の

○神聖

○品位

○おしなべて

使はしめよう

品位からいつても、これはなるべく本に復したいと思ふ。無論これは一般におしなべての事で、労働者をして獨り敬語を使はしめようといふのではない。國民一般何れの階級の人も、他人と談話する時には、マスことばを用ひるやうにしたいと思ふ。文章體の口語としては、敬語がなくてもよいが、談話體の口語には、一般にマスことばで應對するやうにしたいのである。今日では店先で買物をする人が店員に向かつて横柄な言葉遣をすることは少くなつたが、小使や給仕などにはまだ敬語を使はないのが普通である。これらはすべて改正して、目上から目下へもマスで話しかけるやうにしなければならぬと

○應對する

○横柄

○復活

○奨勵する

○謙語

思ふ。目下から目上へ對しては無論の事である。敬語なしの談話と敬語のついた談話とでは、その親しみの上からも、禮儀の上からも、大變な心持の相違がある。私はこれからは小使であらうが、車夫であらうが、又は友人であらうが、なるべくマスことばで話したいと思ふ。さうして労働者などのことばにも、マスを復活させたいと思ふのである。

それが爲には、第一に小學校において、このマスことばを奨勵しなければならぬ。このマスの談話體口語（敬語といふよりも寧ろ謙語）の練習等を盛んに行はせなければならぬ。この美しいマスことばで、いかなる場合

○階級制度
○嫉妬

○尊大倨傲

にも國民がお互ひに話し合ふことに一致すれば、これまでの階級制度に對する不平や嫉妬も、幾分かは減退されるであらうし、一方からは尊大倨傲と思はれることもなくなるだらう。國民思想の統一も、かういふ所から成り立ち、國體の尊嚴もおのづから保たれるのである。私は靴の底でマツチをすつたり、途中で知人に會つても帽子も取らないやうな禮儀作法の乏しい外國人などは學びたくない。我が國語の特點、美所を保存する上において、あくまでこのマスの談話體を整理し、且つ大いにこれを發達させなければならぬと思ふ。

(芳賀矢一文集)

薄田泣菫
詩人、隨筆家、名は
淳介、岡山縣の人、
明治十年生。

六 若葉の雨

薄田泣菫

野も、山も、青葉若葉となりました。この頃は、とりわけて今年はよく雨が降るやうです。雨といつてもこの頃のは、草木の新芽を濡す春さきの雨や、もつと遅れて来る梅雨季の雨に比べて、また變つた味はひがあります。春さきの雨はつめたい。また梅雨季の雨は憂鬱に過ぎますが、その間にはさまれた晩春の雨は、明るさと快活さとまた暖かさにと充ち溢れて、銀のやうに輝いてゐます。春さきの雨は無言のまゝ、濡れかゝりますが、この頃の雨はひそくと聲を立てて降つて來ます。その聲は空の

○憂鬱

○充ち溢れる

〇かぐはしさ

靈と草木の精との囁きで、肌ざはりの柔らかさ、溜息のかぐはしさも思ひやられる様な、静かな親しみをもつてゐます。時々風が横ざまに吹きつけると、草木の葉といふ葉は、雨の雫が首筋を傳つて、腋の下や乳のあたりに滑り込んだやうに、冷たさとくすぐつたさとで、たまらなささうに身を揺ぶつて笑ひくづれてゐるらしく見えるのも、この頃の雨でないとい味ははれない快活さです。

〇氣にする
〇不器用

この快活さと明るさとに、そのかされて、蟄蛙はのつそりと草葉の蔭から這ひだして來ます。どうかした拍子に雨垂が顔の上に落ちかゝると、蟄蛙はちやうど酔ひどれが口の端の泡を氣にするやうに、不器用な手つきで

〇昔馴染

一茶
俳人、小林彌太郎、
號は俳諧寺一茶、信
濃の人、文政十年（一
八一七）歿、年六十五。
〇氣づかふ

そつと鼻さきを撫でまはしてゐます。そして時々立ち



若葉の雨

どまつて、昔馴染の俳人一茶が、旅姿のまゝで、ぐしよ濡れになつてゐはしないかと氣づかふやうに、きよろ／＼とあたりを見まはしてゐます。蟄蛙よ、お前が尋ねてゐるらしい一茶はい、俳人だつたが、彼の魂は長年の悲しみと苦しみのため、にねぢけてゐる。明るいこのころの雨に一緒に濡れるには、ふさはしからぬ友達の一

〇ねぢける

人です。お前にはもつといゝ友達がそこに出て來ました。

それは蟹です。蟹は土まみれの甲羅のまゝで、庭石の
かげから横柄を身ぶりで這ひだして來ました。鋼鐵製
の蒸氣機關の模型か何かのやうな頑丈づくりで、ぶつぶ
つ泡を吹いてゐるところは、どう見てもドイツ人の考案
したらしい生物で、甲羅のどこかに「クルップ會社製造」
とでも極印が打つてありさうな氣がします。私の家は
海近い砂地に建つてゐるせみか、蟹が澤山ゐて、梅雨季に
なると、壁を傳ひ柱にすがつて、疊の上になで這ひあがつ
て來ることがよくあります。蟹よ、お前と墓蛙とは、それ

○頑丈づくり

クルップ會社
ドイツのエッセンに
ある鐵工場。

○極印

○自尊家

○孤獨性

○厭世

ショペンハウエル
ドイツの哲學者。
(西曆一八一八—一八六〇)

○冷淡

○厭世詩人

バイロン
英國の詩人。
(西曆一七八八—一八三〇)
○歡迎

ぞれ異なつた生活をしてはゐるが、どちらも自尊家で、自
尊家につきものの孤獨性をも
つてゐるところはよく似てゐ
るやうです。むかし厭世哲學
者のショペンハウエルは、イタ
リーの都に旅をして、ところの
人たちが、自分に對しては一向
冷淡なのにひきかへて、同じ時
同じ都に來てゐた厭世詩人の
バイロンに對しては、まるで王
侯をもてなすやうな歡迎ぶりなのを見て、ひどく機嫌を



○そこ／＼に
○曲者
○不器量

蝸牛



○沈黙家
○著のみ著のまゝ
○靈場めぐり
○一切合財

損じて、そこ／＼に旅をひきあげたといひますが、蟹と蟻蛙とはどちらにも曲者揃ひで、不器量なことにかけてもいい取合はせですから、お互に機嫌を悪くしあはないで済むことです。

木の上ではまた、雨蛙と蝸牛とが雨を楽しんでゐます。雨蛙は聞えた獨唱家ですが、蝸牛はまた風がはりを沈黙家です。一人は葉から葉へと飛び移りますが、一人は枝から枝へと滑り行きます。雨蛙は藝人のやうに、著のみ著のまゝで、どこへでも出かけますが、蝸牛は靈場めぐりの巡禮のやうに、自分の荷物は一切合財ひつくるめて、背にしよつて出かけます。二人はたまに廣い青々した芭

○餘念がない

蕉の葉の上で出逢ふことがあります。たがひに目禮のまゝ、言葉一つ交さないでさつさと往きすぎてしまひます。彼等はどちらにも腹一杯雨を楽しみ、雨を味はひ、また雨に戯れるに餘念がないのです。ぐづ／＼してゐると、雨がいつ霽れあがるかもわからないのを知つてゐますから。

夜がふけて、湯槽にのんびりと體をのぼしながら、しとしと降り續く雨の音を聞く氣持は、私の好きなものの一つですが、それには、この頃の雨がもつともふさはしいと思ひます。

(天地讀頌)

夏目漱石
文學者、名は金之助、
東京の人、大正五年
歿、年五十。

七 峠 の 茶 屋

夏 目 漱 石

「おい」と聲を掛けたが返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。

向側は見えない。五六足の草鞋が寂しさうに庇から釣

るされて、屈託げにふらりと揺れる。下に駄菓子

箱が三つ許り並んで、側に五厘錢と文久錢が散らばつて

ゐる。

「おい」と又聲をかける。土間の隅に片寄せてある白

の上にくくられて居た雞が、驚いて眼をさます。「くくく

く」と騒ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡

見え。

○屈託げに

○無 斷



峠 の 茶 屋

れて、半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて、牀几の上へ腰を下した。雞は羽搏きをして白から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子がしめてなければ、奥まで駆けぬける氣かも

控へ。

〇とぐる

〇悠長

燃え。

知れない。雄が太い聲で「こつけこつこ」といふと、雌が細い聲で「けゝつこつこ」といふ。まるで余を狐か狗かともおもつてゐるらしい。

牀几の上には一升榊ほどの煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐるを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻ぶつて居る。雨は次第に収まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火が燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は吞氣に燻ぶつてゐる。どうせ出るにはきまつてゐる。

〇二十世紀

しかし自分の店を明放しても苦にならないと見える所が少し都とは違つてゐる。返事がないのに牀几に腰をかけて、いつまでも待つてゐるのも少し二十世紀とは受取れない。その上出て來たお婆さんの顔が氣に入つた。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

〇嘸

「生憎なお天氣で、嘸お困りで御座んしよ。おゝ、大分お濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。」
「そこをもう少し燃しつけてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」
と立ちあがりながら「しつくと二聲で雞を追ひ下げる。
「こゝゝゝ」と驅出した夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の
中を踏みつけて往來へ飛出す。雄の方が、逃げるとき駄
菓子の上へ糞を垂れた。

○一筆書き
○無雜作

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか刳拔盆の上に茶
碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆書
きの梅の花が三輪、無雜作に焼附けてある。
「お菓子を。」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵
棒ほうとを持つてくる。糞はどこぞに著いて居らぬかと眺
めて見たが、それは箱のなかに取残されてゐた。

○うづくまる

婆さんは袖無の上から禱たごをかけて、竈の前へうづくま
る。余は懷から寫生帳を取出して、婆さんの横顔を寫し
ながら話をしかける。

○閑靜

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなほ聞きたい。」

「生憎今日は先刻さうきの雨で何處ぞへ逃げました。」

折柄竈の内がばちくと鳴つて、赤い火がさつと風を
起して一尺餘り吹出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かる。」といふ。軒端を見ると、青い烟が突當つて崩れながらに、微かなあとをまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。おかげで生返つた。」

「いゝ、工合に雨も晴れました。そら、天狗巖が見え出しました。」

逡巡として曇り勝な春の空をもどかしと許りに吹拂ふ山嵐の、思ひ切りよく通り抜けた前山の一角は未練もなく晴盡して、老嫗の指さす方に巘さんぐらんとあら削りの柱の如く聳え立つ、あれが天狗巖ださうだ。

(章 枕)

○逡巡
○巘 巘

海上龍子
明治時代の歌人海上
嵐平の夫人。

八一 樹の蔭

海上 龍子

影にそふ形のごとく亡き靈も

君を守りて離れざりけむ

茶臼山の和議、いかでか永へに平和を保たんや。これ元より一時の權謀に過ぎず。軍馬を休めしも東の間にて、再び夏の陣とはなりぬ。關東の寄手大舉して大阪城を圍む。故太閤の餘徳を偲びて參集せしもの數萬騎に及べども、譜代の士すくなくして、多くは只これ烏合の勇士のみ。

去年の十二月、和議の御誓文御取交しの使として、主命

故太閤
豊臣秀吉のこと。
○餘徳を偲ぶ
○譜代
○烏合

去年
慶長十九年(三七四)

○膽を寒からしむ

を辱しめず、而も其の威風關東武士の膽を寒からしめ、なほ老將家康をして感涙の袖を絞らしめたる木村長門守重成、その妻は眞野豊後守頼包よしかねが女なり。容姿美しく、心優にして操いと堅し。

○氣色

○訝し

昨日今日、夫の氣色常に變りて、食事さへ斥け、深き思案に打沈めるを見て、訝しさに堪へず、夫に向かひて、「去年今福の合戦にて、向かふに敵なき君の勇戦には、關東五十萬の大軍も、舌をまきて驚けりと傳へ聞き侍る。今や御家の御武運旦夕に迫れり。日頃の御恩に報い給ふもこの時なり。然るを何とてこの日頃、物思はしげにて、食事をさへ斥け給ふぞや。」と問ふ。重成莞爾として打笑み、

○舌をまきて驚く

○旦夕に迫る

○報い給ふ

○然るを

○莞爾

「御身の訝るも理なり。こは餘の儀にあらず、五穀胃に入りて二十四時を経ざれば消えずとかや。今は何時討死せんも圖り難き折からなり。されば、穢き物を斥けて、死後の身を潔くせんのみ。」と答ふれば、妻は心を安んじて、己が室へと退きぬ。

○こは如何に

○自害

○水莖の跡

○他生の縁

○偕老の契

翌朝起出でて見れば、こは如何に、夜半の嵐も吹かなく、難波の春に先立ちて、散りゆく梅の花一輪、我と我が喉搔切りて、見事に自害を遂げたり。重成且つ驚き且つ悲しみつゝ、妻の遺書を急ぎ披けば、水莖の跡も鮮かに、一樹の蔭、一河の流、皆これ他生の縁と承り居り候が、さてもをととせの頃ほひ、偕老の契をなしてより、たゞ影

項羽

支那楚の王、西曆前二〇二年、沛公との戦に敗死、年三十一。

虞氏

項羽の寵を得た美人。

木曾義仲

源氏の武將、一旦平家を西に走らせたが、

壽永三年（八四四）範

頼・義經の軍に敗れて殺された。年三十

一。松殿はその寵を得た女。

〇かや

〇海山の鴻恩

〇忘却

の形に添ふが如く思ひ參らせ候に、此の頃承り候へば、此の世かぎりの御催の由、蔭ながら嬉しく思ひ參らせ候。唐の項羽とやらんは、世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名残を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別を惜しむきとかや。されば世に望窮りし妾が身にては、せめて御身の御在世の中に最期を致し、死出の道とやらんにて待ち上げ奉り候。必ずく秀頼公多年海山の鴻恩御忘却なきやう、頼み上げ參らせ候。あらくかしこ。

妻より

長門守重成様

〇後髪ひかるゝ憂
〇光風霽月
〇心ゆくばかり

さても健氣なる覺悟やと、疾くに死を決したる重成も、妻の自害によりて、後髪ひかるゝ憂もなく、光風霽月の清しき心地さへ加り、やがて元和元年五月六日、心ゆくばかり戦ひをさめて後、薰り床しき兜の首を敵の手に渡しけり。

〇あはれ
〇天晴

あはれ、若木の櫻は散りたれど、髻にこめし蘭麝の薰は永へに匂ひて、今に滅せざる天晴床しき重成が最後と共に、並び稱へらるゝは、夫の大義を成さしめし其の妻の最後なり。時に重成二十一歳、妻十八歳。

(たのもしき婦人)

黒田初子
登山家、東京の人、
明治三十六年生。

秩父
群馬縣の西部の山。

〇清々しい

九山の感觸

黒田初子

「未だ山に登つたことが無い。」といふ人でも、所謂日本アルプスや秩父に入つたことが無いといふだけで、誰でも家の裏山や、ちよつとした丘陵などには登つたことがあるでせう。さうすると、平地にゐる時とは全く異なつた、清々しい氣持になり、今まで見えなかつた遠くの山々が、美しい線をひいてゐるのに驚くでせう。それから、同じ大空の下にゐるとは思へない程、雲の色や形の美しいのに驚嘆の目を見はるでせう。そして、登る時には少し足がだるくても、「あゝ登つてよかつた。」と勇んで駆け

〇まして

〇千古不伐

〇靜寂
〇都會の騒音

〇感觸

生えた

〇感傷的

下りることだと思ひます。

まして、海拔五千尺から一萬尺の山に登つてみれば、それは裏山などの比では無い。千古不伐の晝なほ暗い大森林の中を歩むとき、その靜寂は全く都會の騒音を忘れさせ、頭のしんから休まる思がする。さういふ林の中の小徑は軟らかで、ふかくと草鞋の足に何とも言へない優しい感觸を楽しましてくれる。若し又雨が降つてゐたならば、身體の濡れるのを嫌ふより先に、美しく清められた樹々の翠に新たな美を見出すでせう。黒木の森を過ぎ、白樺の生えた山路にさしかゝれば、低い所では見られないこの木の幹の色は白く、感傷的な若い人達に、數々

與へる

雷鳥



の優しい詩を與へる事でせう。

もつと高い所になれば偃松が出て來ます。その下からよち／＼出て來る雷鳥の可愛らしさ。あれに石をぶ



お花畑

つつけて殺した人があつたといふ昔の話を聞いて、どんなに驚いた事でせう。何も悪戯わるさをしないで、親子睦まじく岩陰を散歩してゐる姿は、どんなにか山行く人の心を和らげてくれるものでせう。その他、私共を喜ばせるお花畑がある。私などは花が好

○樂園

鈴蘭

○やまのこと

○魅力



きなので、お花畑と聞いただけで、もう嬉しくなつて了ふがつしりした岩から、目も覺めるばかりにはでな花が生えて、風にゆれてゐるのも美しく、五色ヶ原の様に、一面に足の踏み場もない程に、無數に花が咲いてゐるなどは、この世の樂園としか思はれない。高原に寝ころんで、何だか佳い香りがすると思つて氣をつけてみると、耳のまはりに一ぱいに鈴蘭が立つてゐるなどは、何といふ嬉しいこととせう。

このやうな女性的な美しさもさることながら、天をつく巨大な岩峯や、風雪にさらされた岩肌や、魔物のやうな口をあいた雪溪の龜裂などは、又一種特別な魅力を持つ

○峻險
○高鳴る



隼

○確保する

てゐる。どこから登るのか殆ど手のづけやうのない岩壁が私共の行手にあつたとしたらどうだらう。山人の胸はその岩峯が峻險なら峻險な程、高鳴るのである。口―プを肩からおろす手には眞剣な力がみなぎり、登路を探索うとする目は、隼のやうに鋭く光るでせう。そして一度その岩壁に攀ち上るや、一舉一動は總べて尊い生命を的にしての動作である。ぐいぐいと手懸りを得て登るのは、實に愉快の限りである。そして自分が足場のよい所へ落著いて、親しい友の登攀を確保し、お互に一條の繩で生命を共にするものである。山で結ばれた友情は、どれだけ強いものか判らないと言はれるが、殊に繩で結

親しみ

○喜悅

○秘藏
ピッケル



雪 溪

び合つた仲間、同行者の中でも一層親しみを感ずるものである。下から見上げて武者ぶるひさせられた岩峯の頂に立つた時の氣持は、他のどんな遊びでも味はふことの出来ない喜悅を與へるものであらう。岩もこの様な緊張を私共に與へてくれるが、氷も亦同様である。滑り易い氷や雪の急坂を登るのは、手懸りが無いだけに一層不安である。秘藏のピッケルで足場を切り、下も覗けないや

○雪 溪

數貫
四貫が十五疋に當る。

うな急坂を横切るのは全く眞劍そのものである。又、雪溪の龜裂に出合つた時も、どんなに心を用ひる事でせう。飛び越すことの出来ない様な魔の口がてらくと蒼く透きとほつて、底知れない溝をつくつてゐる。數貫の荷を負つて、ひたすらこの雪溪を登りきらうと、早朝から一歩一歩登つて來た人達が、どうしてこの魔の口に追ひ返されて退く氣になれようか。どうかして渡りたいと願ひ、長いクレパスの内の一番狭さうな所を探すもどかしさ。さうしてゐる内にも焼けつくやうな太陽の熱は氷を溶かして、一層口を大きくさせるかとさへ感じられる。山の豪雨や落雷の凄さも、到底下界では想像も及ばな

○下 界

クレパス
氷河の運動又は溶解によつてできる雪の隙間。

○極 寒

○攀 ぢる

い。その他、冬の登山で經驗する極寒に對する忍耐や、雪崩に遭ふまいとする心遣ひなどを思へば、山登りは唯樂しいからするとか、美しい景色だから行くとか言ふには、餘りに大きな苦痛を伴ふ。二百米もある斷崖から落ちて全身に數十箇所の傷をした人が、二箇月と經たない内に、同じ岩壁に攀ぢようとした話を聞いたことがある。山に數十回登つた人で、よくあの時無事だつたとか、もう一足で滑りが止らなかつたら生命は無かつたとか、さういふ經驗を持つてゐない人は無いやうだ。それでも決して懲りないで、精出して行くのだから、山の好もしき感觸は、説明以上のものなのであらう。

(婦人の山とスキー)

湯淺常山

徳川時代の儒者、岡山藩の人、服部南郭に古文辭學を學ぶ、天明元年(西一七四一)歿、年七十四。

太田持資

入道して道灌といふ。上杉定正の臣、文明十八年(西一四八六)歿、五十五。

蓑 茅又は菅などの莖葉を編んで作つた雨具。

七重八重花は咲けども云々

後拾遺集の歌。

山吹



おもて

心歌

心

湯浅常山

太田持資、上杉の家老なり。鷹狩に出でて雨に逢ひ、百姓の家に入りて、「蓑を貸し候へ」といひしに、若き女物は何ともいはずして、山吹の花一枝折つて出しければ、「花をくれよと言ふことにてはなし」と腹立ちて歸りしに、これを聞きし人の、「それは、

七重八重花は咲けども山吹の

みのひとつだになきぞ悲しき

と言へる古歌の心にて、蓑なしと申すことを、花もて知らせ申したるなり」と申しければ、持資駭きて、「我これほ

〇だに

〇志を寄す

下總の國
いま千葉縣と茨城縣
との中に入る。

〇折ふし

〇干る

遠くなり近くなる
のみ云々

冷泉爲守の歌。

〇潮のみちひ

どのことだに知らで、百姓の娘に劣れること口惜し」とて、それより書を讀み、歌に志を寄せけり。

或時、下總の國へ軍を出ししに、山涯の海邊に、山の上より石弓を張りたり。潮たゝへたらば、通りがたかるべし。

「いかが」といひしとき、折ふし夜半なるに、持資、「いざ見て來らん」と馬を乗り出しけるが、そのまゝ歸り、「潮は干たり」とて軍を押し通しけり。これは

遠くなり近くなるみの濱千鳥

鳴く音に潮のみちひをぞ知る

とよめる歌あり。それを思ひ出して、千鳥の聲遠く聞えたられば潮の干たるを知りたりとなり。

か……べき。

そこひなき淵やは
さわぐ云々

素性法師の歌。

○やは

○下知す

○名だたる

八幡太郎義家

源頼義の長子。

安倍貞任

頼時の子。

宗任

貞任の弟。

衣川

岩手縣(陸中國)膽澤
郡衣川村。

また、退口に利根川を渡す時、これも夜半にて、「暗さは
暗し、いづこか浅瀬なるべき。」

と口々に言ひけるに、持資、

「そこひなき淵やはさわぐ山川の

あさき瀬にこそあだ波は立て

とよめる歌あり。波の荒き處を渡せ。」と下知して、難な

く浅瀬を渡りけり。

かくの如く、昔より、名だたる武將は必ず學問に心を寄
せ、歌の道を知りけり。

奥州の合戦に、八幡太郎義家、安倍貞任、同宗任を攻めて
衣川の城に追ひつめし時、「きたなくも後を見するや、物

いはん。」とて、

衣のたては綻びにけり

と言ひかけしに、貞任、鍛しろうを振向けて、

年を経し絲のみだれの苦しさに

と附けたりければ、義

家は劔はげたる箭をさし

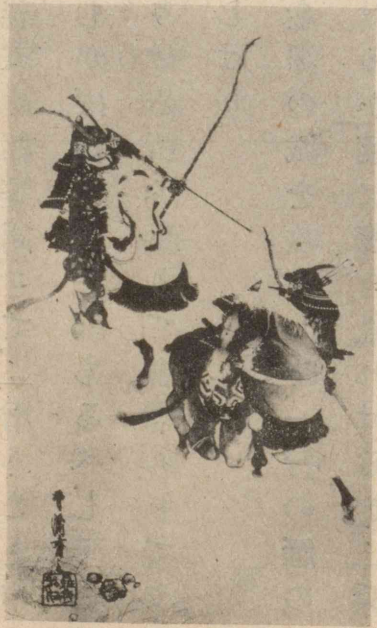
はづしけりとぞ。か

かる烈しき折にてか

く附けたる事、優にや

さしきことなるべし。

かくて義家上京の後、宇治の關白を訪うて軍物語しけ



(筆崎香口谷) ふ追を任貞家義

○優にやさし
宇治の關白
藤原頼通。
訪うて

匡房 大江氏、平安朝の學者、天永二年(七〇)卒、年七十一。
○器量
○仔細

○會釋

るを中納言匡房聞きて、「器量は賢けれども、軍の道は知らず。」と嘖きけるを、義家の郎等聞きて、「憎きこと申され候。」と義家に申ししかば、義家、「仔細あるべし。」とて、匡房の中納言車に乗りける所へ参りて、會釋ありて、やがて弟子になりて學問しけり。

永保の合戦

後三年の役のこと。

金澤

秋田縣羽後國仙北郡金澤町。

鳥の起るは伏なり

(孫子)

○案の如く

など……べき。

永保の合戦に、義家金澤の城を攻めし時、一行の雁の蒨田の面に下りんとしけるが、俄に驚き亂れけるを、「兵法に、『鳥の起るは伏なり。』と言ふことあり。定めて伏兵あるべし。」とて、野の三方を取巻きしかば、案の如く三百餘の伏兵ありしを攻め破りけり。義家學問に心を寄せずば、などかゝることを知るべき。

(常山紀談)

二 緋 緘

落合直文

緋緘の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞお

もふ山櫻花

正岡子規

古里の御寺見めぐる永き日の菜の花ぐもり

雨となりけり

縁先にたま巻く芭蕉たまとけて五尺のみど

り手水鉢を掩ふ

落合直文

國文學者、歌人、宮城縣の人、明治三十六年歿、年四十三。

○緋緘

○ばや

正岡子規

俳人、歌人、名は常規、愛媛縣の人、明治三十五年歿、年三十六。

芭蕉



伊藤左千夫
歌人、千葉縣の人、
大正二年歿、年五十。

伊藤 左千夫

○とよもす

かり立ちて今朝の寒さを驚きぬ露しとく
と柿の落葉深く
よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよも
して兒等が遊ぶも

長塚 節

長塚 節

歌人、小説家、茨城
縣の人、大正四年歿、
年三十七。

○小夜

○とふ
○さる

小夜ふけて咲きて散るとふ稗草のひそやか
にして秋さりぬらむ
白埴しらはにの瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき
水くみにけり

石川 啄木

石川 啄木

歌人、名は一、岩手
縣の人、明治四十五
年歿、年二十八。

このごろは母も時々ふるさとのことを言ひ
出づ秋に入れるなり
それとなく郷里のことなど語りいでて秋の
夜に焼く餅のにほひかな

島木 赤彦

島木 赤彦

歌人、本名は久保田
俊彦、長野縣の人、
大正十五年歿、年五
十一。

我が家の犬はいづこにゆきぬらむ今宵も思
ひいでて眠れる

我が馬の歩みおのづからとままりて野中の
萩の花食ひにけり



萩

若山牧水

歌人、名は繁、宮崎縣の人、昭和三年歿、年四十四。

若山 牧水

うらくと照れる光にけぶりあひて咲きし
づもれる山櫻花

幾山河越えさりゆかば寂しさの果てなむ國
ぞ今日も旅ゆく

中村 憲吉

中村憲吉

歌人、廣島縣の人、昭和九年歿、年四十七。

峡の家古りし洋燈ラッパを今も吊れりひさぐくに
父と膳を並ぶる

梅林の外にて鶴は羽ばたけり芝生につく
る影の大きさ

與謝野寛

歌人、號は鐵幹、京都府の人、昭和十年歿、年六十三。

與謝野 寛

二荒山山火事あとの立枯の白木の林うぐひ
すの啼く

山の風凍りて寒し草焼けば青きけぶりに薄
みぞれ降る

古泉 千櫨

古泉千櫨

歌人、名は幾太郎、千葉縣の人、昭和二年歿、年四十二。
○五百重山

五百重山夕かげり來て道さむししくくと
子は泣きいでにけり

山のうへに月はいでたり汝が知れるかのよ
き歌をうたひつゝ行かむ

三 南京の壺

柴田鳩翁

柴田鳩翁
心學道話家、名は亭、
京都の人、天保十五
年（五〇巴）歿、年五十
七。

お年寄

町年寄のこと。

町役

町役人の略、名主五
人組等をいふ。

〇さる

〇婚禮振舞

聞えて

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をは
じめ、町役家持の人々、一同に座に著きますると、さまざま
の馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露に
も酔ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうに
してゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御
酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子
なりとも御取り下され。」と、南京の古染附の壺に大輪の
金米糖を入れて、年寄の前へ持つてくる。

座中も「これはよいお心づき、ひらにお菓子をめしあ

ひらに

わるうは

〇きしむ

がれ。」と勧めると、年寄もわるうはなし。「しからは頂戴
を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、
少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて撮み出
さうとするに、手首がつかまつて抜けませぬ。どうぞして
抜けるかと、色々にこじまはして見ても、引つばつて見て
も抜けず、まご／＼して居られると、側から見つけて、「ど
うなされましたぞ。」

「いや、手少しつまりました思ふやうに抜けませぬ。」

と眞顔になつて云はれる。「それはお氣の毒、私が壺を持
つて居りませう、無理無體に手をお引きなされ。」と、一人
が向ふへ廻つて、壺をつかまへ後へ引くと、年寄は手を前

〇無理無體

景清と美保の谷
悪七兵衛景清と美保
の谷十郎、源平屋島
の合戦の時の一挿話。

笑は。す

に引く。互に「えいや」と
引きあふ有様、景清と美保
の谷が鋳曳しろうびをするやうな
と、座中が一同にとつと笑
へど、年寄はなかく、笑は
ず、泣顔になつて、「どうも
痛んで抜けませぬ。」とい
ふ。さあ、これから大騒ぎ
になり、「醫者どのを呼ん
で来い。骨接ではゆくま
いか。」と、酒宴の興も醒め



○酒宴の興

はてました。

○五人組
司馬温公
宋の名相、名は光、
字は君實、温公は諡。

時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騒ぎなさる
な。われら承つたことがある。『昔、司馬温公と云ふ人、幼
きとき、大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊びま
したが、一人の小兒誤つてかの壺の中へはまりました。
大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬温公ひとり
は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投げつけ
ましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命が助
りました。』と或人の話ぢや。いまお年寄の御難澁は此
の話に能う似てある。いざや、われらが司馬温公となつ
て、譬へば、その古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品で

○難澁
能う。

○高金

○しかつべらしい

砕いた

○攫む

○自由自在

○片意地

も、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向ふへ廻れば、年寄は氣の毒さうに壺をかぶつた手をつき出すと、只一打に打砕いた。何がさて、座中は金米糖がちらかつて雪を降らしたやうになると、「やれ、お年寄お助りなされたか。」と、その手を見れば、抜けぬこそ道理。金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。

攫んだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度攫んだら、首がちぎれても放すまいと、片意地な生まれつき。それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば、錢金の事のやうなれど、攫むものはこれ

○紛らす

しまつて云うても

鳩翁道話
柴田鳩翁の著した寓
話教訓集。

ばかりではない。器量のよいのを攫み、賢いを攫み、負けをしみを攫み、家柄を攫み、身代のよいのを攫んで、放すまいとかつぎ歩くによつて、教を聞くこともならず、樂をすることともならず、慎も出来ず、せん方なさに癪氣抑へたり、顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござります。

壺割つてしまつてからはなんと云うても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき御用心が第一でござります。

(鳩翁道話)

小笠原長生
宮中顧問官、海軍中
將、子爵、佐賀の人、
慶應三年生。

一三 皇天の加護

小笠原長生

- 動もすれば
- 萬能至上
- 無視する
- 楯の一面

現代の年若い學生たちには、動もすれば、最近著しい發達を遂げた科學を以て萬能至上のものとなし、心靈や信仰などの精神的方面を無視したがる者がある。思ふに、これはたゞ楯の一面のみを知つて、他の一面を忘れてゐるからであらう。

- 物質生活
- 謬見

科學は勿論吾人の物質生活を支配する重大な要素である。しかし、この科學のみを以て吾人の生活や思想の全部を解決し得るものとするならば、それは謬見である。試みに思へ。いかに發達を極めた最近の科學を以てし

- 未解決
- 神祕

ても、なほ幾多未解決の神祕な問題が残されてゐるではないか。

- 天佑神助
- 疑はない

私がこゝに言はんとする皇天の加護といひ、天佑神助といふことも、實にその一つであつて、私はこれを信じて疑はないのである。

- いくそたび
- 八田知紀の歌

いくそたびかき濁しても澄みかへる水や

御國の姿なるらん

- 國難に直面する
- 悠々三千年
- 金甌無缺
- 御稜威

古來、我が國が幾度か國難に直面しながら、少しも國威を損ずることなく、悠々三千年の金甌無缺の國體を保ち來つたのは、上は天皇の御稜威、下は我が忠良なる臣民の力によること勿論ながら、實にこの天佑神助の賜でなく

○加護あらせられる

文永

龜山天皇の御代の年號。(二九四—二九七)その十一年元の兵が壹岐對馬に來寇した。

弘安

後宇多天皇の御代の年號。(二九八—三〇一)その四年元の兵が壹岐を侵し筑前に來襲したが、大暴風のために戦艦は覆没し、我が兵はこれを撃滅した。

○國運を賭す

○都度

寛政

光格天皇の御代の年號。(三四九—三五〇)○桃源の夢

して何であらう。即ち、上は天照皇大神より歴代皇祖皇宗を始め奉り、八百萬の神々が、常に我が國を加護あらせられてゐるからではないか。

かの文永・弘安の兩役は固より、近くは日清・日露の二大戦役に至るまで、何れも我が國運を賭した國難であつたにも拘らず、よく皇土の全きを致し、その都度一層の盛運を齎すに至つたのは、決して只事ではあるまい。

併しながら、ここに皇天の加護といひ、天佑神助といふも、その解釋に至つては、私は一部の世論と些か趣を異にするものである。

寛政の頃、桃源の夢遂に破れて、北邊漸く急を告げ來つ

林子平

志士、名は友直、寛政五年、歿年五十六。○率先する

○擁護

顧みよう

○憮然

○擲揄する



林子平

た時、仙臺藩士林子平は、率先して當局に向かつて海軍充實の急務を叫んだ。併し、時の幕府を始め世人の多くは、「外夷何ぞ恐るゝに足らんや。我が神州には伊勢の神風の擁護がある。夷船海を埋めて襲ひ來るとも、神風直に起つてこれを打沈めてしまふであらう。」と稱して、更に子平の説を顧みようともしなかつた。

これに對して、子平は憮然として、「徒に坐して神風を待たんとするか。」と擲揄したことは有名な話である。

○木に縁つて魚を求む

誠に子平の言葉のごとく、努むべきを努めず、爲すべきを爲さずして、たゞ徒に天佑を待ち、皇天の加護を祈ることとは、實に謬れるも甚だしいと言はねばならぬ。若し、かくの如くして天佑を得ようとするならば、所謂木に縁つて魚を求めるよりもさらに甚だしい愚といふべきである。

○至言

東郷元帥は常にいふ、天は必ず正義に與し、神は必ず至誠に感ず」と。實に至言である。天佑を得る道は、常に正義と至誠との二つでなければならぬ。この二つを以て一貫すれば、如何なる困難に遭遇しても、そこに必ず天佑のあることは毫も疑ないのである。

○一貫する
○遭遇する

○換言すれば

伴なふ

○多々

○就中

元帥は更にいふ、天佑は必ずある。若しこれがないとすれば、それは未だ此方の至誠が足りないからである。」と。これを換言すれば、至誠あるところ必ず神助あり、正義あるところ必ず天佑を伴ふといふのである。



東郷元帥

我が國の世界に誇るべきことは多々あらうが、就中我が國三千年の歴史が常に光輝ある正義と至誠とに満たされてあるといふことが、その主なるものの一つでなければならぬ。随つて、如何なる國難にも天

○影の形に添ふやう
○磐石の安き

佑が影の形に添ふやうに伴なつて、我が國を磐石の安きに置いてゐるのである。

忝うする

我が國は正義と至誠とによつて立つ國であるとともに

○具體的

に、また天佑を忝うする國である。これに關して、最も具體的な實例たる日本海大海戰の場合に就いて言つて見

たい。

當時我が將士は、世界の最強國たる露西亞を敵として

○ひたすら

ゐるだけに、既に戰前から、ひたすら君國のため盡忠報國

○盡忠報國

の至誠を以て、訓練に訓練を重ね、一日として怠らなかつ

○や

たのである。しかも愈、大海戰の當日となるや、

「天氣晴朗ナレドモ浪高シ。」

○鐵 艦

○照準を定める

と、東郷司令長官の報告にある通り、激浪のため彼我の鐵艦は頻りに動搖して、照準を定めるに非常な困難を覺えたのであつたが、それがために、敵の放つ砲彈は大概中らなかつたに反して、我が砲彈はよく敵艦に命中して、我が將士の熟練せる技能を十分に發揮することが出來たのである。

○命中する

これは正に天佑である。即ち至誠の賜に外ならなかつたのである。

○しかのみならず

しかのみならず、我が國には、東洋の平和を維持せんとする正義があつた。

この正義が感應して皇天の加護があつたのである。

この事實は、一面また「天は自ら助くる者を助く。」といふ

○西 諺
教へる

○寧ろ

○上御一人
○體する

○内外に處する

○期して待つべし

西諺の眞なることをも教へるものである。
こゝに於いて、吾人は我が國が天佑の國であることよ
りも、寧ろ正義の國であり、至誠の國であることを誇りた
いと思ふ。

我が國民が常に上御一人の大御心を體し、至誠と正義
とを以て内外に處するところがあるならば、そこには必
ず天佑が生まれ、神助が降り、國家の盛運は愈、期して待つ
べきであらう。私はかく信じて疑はぬものである。

(日本の誇)

沼波瓊音

國文學者、俳人、名
は武夫、愛知縣の人、
昭和二年歿、年五十
一。

○輪廓

○劃然

○劃然

○變調

○平衡を失する

○濟ます

○重 患
聖上陛下
明治天皇。

一四 二重橋のほとり

沼 波 瓊 音

明治四十五年七月二十日、その日は何だか變な青空で
あつた。眞黒な輪廓の凄く劃然とした雲の大塊が、空の
半ばを領して横たはつて居た。其の爲に地上の物の色
が氣味悪き變調を呈して居り、水のやうな風が足許から
吹いてゐた。歸宅したが、斯ういふ平衡を失した氣象に
居たまらぬのが、私の病である。晚餐を濟ますと直ぐ目
的も無く家を出て電車に乗つた。

ふと隣席の人が夕刊を讀んでゐるのを見ると、聖上陛
下の御重患を報じた記事の題が大きく見えた。今夜の

兩國川開も、爲に中止になつた事も見えた。私ははつと
した。先刻聞いた號外賣の聲は、それであつたかと思ひ
當つた。

○奉侍する

翌日から陛下の御病狀は、新聞により、號外によつて、殆
ど御傍に奉侍するが如く承り得た。併し私はいづれ御
癒りになるだらうと思つて居た。ところが御病狀は、追
追と御悪いやうであつた。これではと驚かれるやうな
報告もあつた。

○平癒

新聞は、三重橋畔に人々が寄集つて、御平癒の祈願をす
る記事、及び其の寫眞を日々掲げるやうになつた。其の
寫眞には、素朴な老媪の地上に伏して居る姿などがあつ

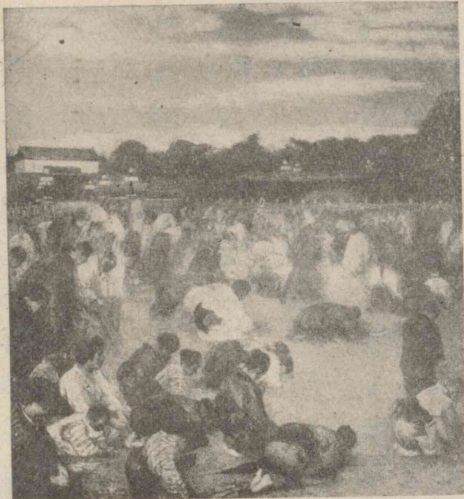
○素朴

○祈願

た。人々は會ふ毎に、御病狀を語るやうになつた。各區
の住民は、もよりくの神社に集つて祈願を籠めた。其

○熱暑

○揭示



國民の祈禱

處には、燬くが如き熱暑の
日にも、夥しき人が集つた。
各交番所には、御經過の掲
示を見るやうになつた。
電柱などには、出る毎に號
外が貼られた。往來の人
は、必ずそこに足を停めた。
私は心の動搖をどうすることも出来なくなつた。どう
いふ場合でも、筆を執つて居なくてはならぬ、短き人生の

○心の動搖

○空然
見詰めるやうな

○けたましい

○寂として

○閱覽人

出納壇
貸出の書物を出し入
れる壇。

離れよう

間に茫然として居る時間があつてはならぬと常に思つて居た私が、時々筆を棄てて、空然と縁に出て池の金魚を見詰めるやうな事が多くなつた。

二十九日の午後私は上野帝國圖書館に居つた。號外賣の鈴の音が、又けたましく聞える。圖書館の事として誰一人一語をもらす者もない。寂として居た。ぞうといふ音が始つた。顔を挙げると、閱覽人の多くが、皆同じ方角に目を注ぎつゝ歩み行くのであつた。顧みると、出納壇の前に、號外を貼つた掲示板が立てられたのであつた。私は直に椅子を離れようとして一種の恐れを覺えて暫く躊躇した。が、遂に進み寄つた。

○標題

○悲痛

○聞えない

○卒然

「殆ど絶望」といふのが、其の號外の標題であつた。文中に「御四肢の末端暗紫色云々」の文字が見えた。この前に集つた人々は、黙したまゝ、交るゝこれを讀んだ。言ふべからざる光が誰の目にも輝いた。深い息も聞えなかつた。壇上の係員は黙してこの人々を見て居た。讀み終つた人々は、黙して力なく席の方へ行く。黙々の間に絶望悲痛の大なる號びを聞く心地がした。

今度號外が出たらもう駄目だ。あゝ駄目かなあ、と思ひながら私は歸つた。號外賣の鈴がまだ聞えない。晚餐を済ました。永き日は漸く暮れて行く。號外賣の鈴はまだ聞えない。私は卒然起つて、著物も換へず二重橋

○徐行する

へ向かつた。電車は満員であつた。和田倉門のあたりから響を憚つて、非常に徐行した。この間も號外賣の鈴は聞えなかつた。大半は馬場先門で下りた。

見渡すと、黄昏の二重橋は、唯人を以て埋つて居た。新に設けられた電燈が、そこゝに紫に照つて居た。二重橋上の祝日の折に點される電燈の一つが點火されて居た。私は人を分けつゝ、二重橋の其の一つを正しく左に見る所まで進んだ。「南無妙法蓮華經」と聲振立てて連唱するのが最も高く聞える。念佛の聲も聞える。祓詞を泣聲になつて稱ふるのも聞える。夥しき群衆は、砂利の上に端坐し、或は平伏して、思ひくゝの神佛の力に縋つ

○點火

○端坐する
○平伏する

○錯綜する

○頻繁

○傍觀的批評

○切迫する

て御平癒を祈つて居る。「どうぞ、どうぞ」といふ聲も聞える。號泣して居る者もある。この吹き通しの廣場も、群衆の爲に蒸すやうな暑さである。尻端折つた人々が、祈願者の間を往來して、團扇で扇いでやつて居る。様々の祈の聲はいよゝゝ錯綜して、恐しき響を成して、宮居の内にも聞え行くばかり。宮城へ出入する人は愈頻繁である。

文明か未開か、智か愚か、信仰か迷信か、そのやうな傍觀的批評を思ひ浮かべるには、餘りに高く大きく且切迫した光景である。そこには唯君を念ふといふ純なる熱情が烈火の如く燃え上り渦卷いて居る。「御祈願の方は前

に御出なさい、御祈願の濟んだ方は、なるべくうしろへ行つて下さい、非常な暑さですから。」と巡查が諭して居る。私は祈願の人々の間に入つて、いきなり地上に伏した。「どうぞ御癒りなさるやうに、お癒りなさるやうに。」と斯ういつたとき、涙は迸るやうに流れた。止めどもなくながれた。物質と精神との力の争ひである。物質的に如何に助かるまじき玉體も、人々のこれだけ熱中せるエネルギーによつてお助け申すことが出来ない事はあるまい。人々は愈多く、祈願の聲は愈激しい。私は一先づ後に退いた。そして暫く立つて居た。あらゆる電燈は、捲騰る埃煙に包まれて朧に見える。二重橋の中の橋の上

○迸る

○止めどもなく

○玉體

退いた

に、月が懸つて、雲越しに淡い光を見せて居た。私は涙の溢るゝのを、どうすることも出来なかつた。思はず再び地上に伏して祈願を凝らした。

私は和田倉門の方に出た。この間行き交ふ人の話を聞くに、それは悉く聖上の御身の上であつた。一人として私事を談ずる者は無かつた。歸宅するや、早速多賀神社の神靈を上げてある神棚に燈明を供へしめた。そして、家族に二重橋の光景を語つて、斯うして居る場合でないといつた。妻も子供も婢も、皆連立つて出て行つた。あとに獨り神棚の前にひれ伏し、直泣きに泣きつゝ、禱つた。玉體御安泰に復し給はば、この成功疑はしき一小操

多賀神社
官幣大社、滋賀縣犬
上郡にある伊弉諾・
伊弉册二神を祀る。

○直泣き

○操觚者

○再發

觚者の命などは、召上げられても厭はぬと祈つた。號外の鈴は少しも聞えなかつた。夜に入つて號外の出ぬことは近頃ない。どういふものであらうと思つて居るうち、はや十一時を過ぎた。月は或は照り、或は曇つた。皆が歸つて來た。私と同じ感動を以て歸つて來た。御再發は仕方が無いとしても、ともかくも一旦御癒りになるだけでもよい。この儘御かくれになつては如何にも残念だと妻がいつた。私はあれだけの熱心の力は必ず玉體を支へ得ると信じて床に入つた。

翌朝起きて戸を繰開けて居るところへ、婢が小さい號外を持つて來た。「崩御」といふ字が砒はいのやうに目を刺

した。「おかくれになつたぢやないか」と言つた。婢は「え、さうです……どうも」と言つて去つた。妻の寢てゐる部屋へ行つて、「おい、おかくれになつた」と言つた。「え、さうですか、仕様がありませんねえ」と言つた。

世は極めて靜かであつた。私はこのやうな靜かな朝を経験したことがない。日は淡く照つて居た。金魚が音なく動いて居た。薄赤い花魁草おいらんささの花の下に、莖の地を匍つてゐる桔梗が、珍しく純白な花を著けて、それが靜かに此方を向いて居た。新聞が來た。それには見馴れ奉つた陛下の御姿が、太い黒枠で圍んであつた。

動いて

向いて

今井邦子
歌人、本名は邦枝、
徳島縣の人、明治二
十三年生。
〇けはひ

〇白日の夢
〇斷片的

〇とりとめない

〇境地

〇好奇心

〇おとなふ

一五 母 と 子

今井邦子

門の戸ががらりと開いて、人のはひつて来るけはひが
した。暑い〜日の午後三時頃である。机によつたま
ま、あまりの暑さに、書かうとするものを纏める氣力もな
く、白日の夢を見るやうな斷片的なさま〜の現象が頭
の中に浮かんで消え、浮かんで消えするとりとめの
ない境地から引戻された。この暑い日盛に、誰が來たの
だらう。私は好奇心の混つた人懐かしい氣持で、玄關か
ら人のおとなふ聲を待つた。と、庭の中戸があいて細長
い竿の先がまづ頭を現し、それがずん〜無遠慮に庭に

入つて来る。

「なんだ、坊やなのか。」

私の顔には思はず軽い微笑が浮かんだ。今年六つに
なる男の子が白チョッキに淺黄のズボン、帽子をめんど
くさく頭にのせたといふ形で、長い蜻蛉竿を小脇に挟ん
で、燃立ちさうな赭い顔をしながらはひつて來るのであ
る。右手には鹽辛蜻蛉を一つつかまへてゐる。

いつもの六疊の居間に机を据ゑて、それに倚つてゐる
母親を、その子はちよつと見ただけで、その前をずん〜
通つて、自分の玩具箱の置いてある部屋に行つて、がたが
た何か引つくりかへしてゐる。

据ゑて

歩いて

「坊やは何を捜すの。そして、この暑いのに、日向を出歩いてゐると病氣になりますよ。」

「うん、蜻蛉だい。蜻蛉を入れておく箱がほしいな。母ちゃん、箱ちやうだい。」

抱へて

子供はひよつくり間の襖から顔を出した。まだ竿を抱へて蜻蛉を持つてゐる。

縛る
くわしやう

「いやな人。竿を家の中まで持ちこむなんてありますか。蜻蛉は縛つてあげるから、持つていらつしやい。」

子供はあわてて外に竿を投出して、蜻蛉を持つて母の側へ寄つて來た。

「しつかりつかまへておいで、さあ。」

○反抗する

私は白い絲を輪にして、蜻蛉の動かしどほしの足を狙つて絲をからげた。黒いむじやくとした毛のある細い六本の足。その一本を一つだけ結はへられて、今こまむすびにされようとする蜻蛉は、よくはのみこめぬが、何か自分によくないことが足のところで起つてゐるのを感じ知つて、無意識に、しかし烈しく反抗する。

「さあ、結べました。手を離してごらん。ほらく、飛ぶでせう、ね。」

満足さうに

子供も私も一緒に聲を出して笑つた。子供は満足さうに、また得意さうにそれを持つて、再び竿を抱へると飛んで出てしまつた。――「日蔭でお遊び。」といふ母の言

覺えた

葉は蜻蛉竿の前には、殆ど蛇の唸よりも値のないものやうに。

家の中は再び前の暑い沈黙に返つた。が、私は机によつて、今度は明るいい心に生きくとした思が湧上つて來るのを覺えた。

子供にあの竿を買つてやつた日、家に手傳に來てゐる人が、

「坊ちゃんがああ長い竊竿ももざなを振廻して、この小路を出ていらつしやると、通る人がみんな笑ひながらよけて行きますの。」

といつたので、私たちは聲を揚げて笑つた。その時のこ

誘ひ。

○十方感謝の世界

とが、再び私を優しい笑に誘ひこんでいつた。それからだんく深く、遂に十方感謝の世界へまで到達した。

○故

私はかつて、或親戚の人から、悲しい昔語を聞いて涙を流したことがあつた。その人の生みのお母さんは、故あつてその人の七つの年に實家へ歸つてしまつたのだつた。さうなるまでには、二年も三年も前から悲しい空氣がその家を圍繞してゐたといふ。その人はお正月に友だちと凧を揚げて遊んでゐながら、ふとお母さんが自分の留守に實家へ歸つてしまひはせぬかと思はれて來ると、忽ち凧をしまつて、自分の家へ足音を忍んで歸つて來

○圍繞する

○足音を忍ぶ

る。そして胸を轟かせながら、お母さんの居間の障子の穴から内をそつとのぞいて見ると、お母さんが寂しさうに針仕事をしてゐる姿が目にはひる。そこでほつと安心してまた足音を忍んで、外へ遊びに出かけたといふことである。そして、縣道へ通ずる畑の道より外では遊ばなかつた。それは、お母さんが實家へ歸るなら、必ずその道を通つて、その縣道へ出るはずなので、そこに遊んでゐれば、お母さんを引きとめることが出来ると思つたのであつたと話された。そのことを思ひ合はせてみると、今歸つて來た自分の子供は、何と大膽に無遠慮に安心しきつて、母がそこにゐることさへも感じるか感じないかの

思ひ合はせて
○大膽

空しい心で、私の前を通り過ぎたことか。そして、自分の遊戯に耽りきつてゐることか。それは本當に當然のことであるが、しかし、子供としての限ない恵なのである。げにそれは、健康の人の健康、食べるのに困らぬ人の三度の食事、さういふ中に數へられるべき、求めぬ先にたゞ與へられる限ない自然の恵なのである。
あゝ、子と親と共に住んでゐる家……それは當然過ぎるほどの當然であつて、しかも思へば自然の深い恵である。空しいにも似たその日常、そこにおのづからな深いえにしの絶たれぬ豊かな恵がある。親によつて子は生き、子によつて親も生きる。その拔差しならぬ碁盤の線

○げに
數へる
與へる

○えにし
○拔差しならぬ

の、母といふ目の上にきちんと置かれた自分の位置。ただそこにじつとしてゐることが、既にどんな事業よりも重い、役目をしてゐるのである。

このことに目覺めさせられたのは、何といふ驚であつたらう。それは血と肉と涙で得た一つの悟といつてもいゝほどの世界であつた。それは、見たところ、決して華やかなものでも、莊嚴なものでも、ゆゝしいものでもない。まことにあつけなく、見過せば見過しにされさうな、日頃はあるかないかさへも心に浮かばない日常の連鎖、水の低きに流れるやうな自然の歩みなのである。

母が母としてそこにゐること、そこを守つて守りぬく

○莊嚴
ゆゝしい

○連鎖

○安逸を貪る

堪へ。

こと、その目的は安逸を貪るためでない。苦しい涙と自己犠牲と、時には身の顛ふほどの悲しみにも堪へ、人によつては屈辱にさへも堪へて、この空しきにも似た日常を續けてゆくところに、人間の頭脳では判断することの出来ないほど尊い仕事が果されてゆく。その果されてゆくものの中に自分の眞生命も含まれてゐるのである。そこに十方感謝がある。生かされあふ深い世界があるのである。

朝さむるすなはち側に吾子はをり

この世の常のさきはひを思ふ

○さきはひ

(西草)

佐々醒雪
國文學者、文學博士、
名は政一、京都の人、
大正六年歿、年四十
六。
○變遷

戴いた

竹取物語

著者不明、一名かぐや姫物語、平安朝初期の傳説物語。

伊勢物語

著者不明、主として在原業平の歌を中心にその行跡を記した歌物語。

○野蠻國

一六 言葉の變遷

佐々醒雪

不思議なものは言葉の變遷である。日本語は幸にして二千年近い記録を有してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。しかも、萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間のみ發達したので、今から約一千年前に出來たといはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語で出來てゐる。こんな國は、いふまでもなく、世界中にまたとはないのである。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲諸國などは、皆まつたくの野蠻國であつた。

甚だしく

平安朝
桓武天皇が平安京に
奠都し給うた時から
源頼朝が鎌倉に幕府
を創立するまで約四
百年間。
○薄倖者
○雲泥の違

日本語はこんなに久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味は甚だしく變化したものが多し。例へば、「いへ」といふ語などはその一例であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、随つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、即ち戸主のことであつた。然るに今日「いへ」といふと、家屋、即ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人の事である。我々が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのとは雲泥の違ではないか。

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語がしきりに用ひられはじめたから、同様の變化は認められる。例へば、「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑買が「御不用物はございませんか」と呼んで来る。然るに中古では、「不用なるもの」といふと、用ひるに堪へぬと、んまかあはうのことで、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから父爲義が九州に追つた」などと記してあつて、不用といふのは、いたづら者、または無法者の義である。鎌倉時代に、「不用なものがございますか」と呼び歩いたなら、「いたづら者はゐないかね」と呼び歩く鼠取

爲朝
源爲義の第八子、武將、鎮西八郎と稱す、嘉應二年(八三〇)歿、年三十二。
爲義
源爲義の子、武將、保元元年(八三六)歿、年六十一。

間違へる

○語源

○奇怪

○列擧する

○就中
○希代

藥の行商人と間違へられたであらう。

これ等はまだ單なる變遷で、中には、その變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生じたものもある。漢方醫が廢れて、藥を煎じることがなくなつても、藥罐といふ名は残つてゐたり、その他不思議な言葉を列擧すれば、實際もないが、就中希代なのは、「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器の出來ぬ頃、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに、日本で硬い上等のものが澤山出來るやうになると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひはじめた。そこで、飯食茶碗

いひさうな

とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語が出来た。今日では
コーヒー茶碗とさへいつてゐる。御飯を食べるのやコ
ーヒーを飲むのは、御飯碗・コーヒー碗とでもいひさうな
ものだが、さう理窟通りにゆかないのが言葉である。
「さかな」とは、本来酒を飲む時に食べるものといふ語
である。「さか」は「酒樽」「酒盃」の「さか」である。「な」は
何でも副食物にするものので、古は、野菜類は勿論皆
「な」である。昆布や若布などのやうな食べられる海藻
は、皆「磯菜」といつた。それから、魚類は「な」の中の上等
のものであるから、上等の建築用材を「ま木」といひ、屋根
を葺く上等の草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と

○贅
澤

○異
名

○尊
稱

稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから
來てゐる。然るに、酒といふものは上戸即ち上等の家で
なくては飲用しないし、且酒を飲む時は、今も昔も贅澤な
副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席
に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうにな
つた。既に魚類が「さかな」といふことにきまつてしま
ふと、下戸が食べてもやはりこれを「酒な」といふのは、飯
を食べてもやはり茶碗といふのと同じ不思議である。
言葉はまた使つてゐるうちにだん／＼下落するもの
である。例へば、「大工」といふ語は、工たくみ即ち工藝家中の俊
秀なものの尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であ

○棟梁

つた。然るに、今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛のたゞき大工でもやはり大工である。かの棟梁親方なども同様で、今日は一人の手下もなく子分もない男でも、印半纏さへ著てをれば、即ち親方であり、棟梁である。

○故意
○轉訛

最後に一つ、故意に轉訛せしめた例を示さう。言語の

江戸歌舞伎
江戸時代江戸で行は
れた劇。
○人爲的

變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意につくつた人爲的の言葉がある。一時兵隊言葉といつて、丸木橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止せられたやうだ。

○廢止

その他には、迷信から來た變造語もいろ／＼ある。例

行はれてゐる

○齋宮

へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を、「悪し」と聞えるのを忌んで、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるとして、「よ」といつたり、梨を「ありの實」、硯箱を「あたり箱」、鯛を「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の御所では、髪のない僧侶を、わざと「髮長」といつた例もある。

○窮極
○至當

要するに、言語の不思議な現象は、同一の語が、例へば髮長といつて髪のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

(醒雪遺稿)

河井醉茗
詩人、帝國藝術院會
員、名は又平、大阪
府の人、明治七年生。
歡んで
語つて

一七 山の歡喜

河井 醉茗

あらゆる山が歡んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみして舞ふ、躍る。
あちらむく山と、
こちらむく山と、
合つたり、
離れたり、
出てくる山と、
かくれる山と、
低くなり、

疎い

高くなり、
家族のやうに親しい山と、
他人のやうに疎い山と、
遠くなり、
近くなり、
あらゆる山が、
山の日に歡喜し、
山の愛にうなづき、
今や、
山のかさやきは、
谷いつばいにひろがつてゐる。

(明治大正詩選)

上田恭輔
滿蒙研究家、滿鐵社
員、東京の人、明治
元年生。
○山川草木

凍えて

○滿目荒涼

細かく

一八 滿蒙の四季

上田 恭 輔

滿蒙の冬の天地は、山川草木あらゆるものが結氷する。その間が凡そ五箇月。日本では常磐の緑を誇る松柏も凍えて黄色になる。だから、滿蒙では、滿目荒涼一點の綠色を見ず、西を見ても東を眺めても、雪と氷であり、畑も五六尺の深さまで岩石の如く固くなる。ダイナマイトでないとは容易に穴が掘れない。雪は砂糖のやうに細かく、一度降ると翌年五月までは解けず、河や湖や沼の氷は、その上に枕木を並べて鐵道を架け、汽車を駛^はらせても大丈夫である。この結氷時代が人の活動期であるから、よほ

○頑健

○酷寒
アイスリホッケー
氷上で行ふホッケー
競技。

ど頑健なものでもない、滿蒙の天地には堪へられない。日本人の小學校の校庭には必ずスケート競技場があり、零下二十何度の酷寒の夜でも、煌々とした電燈の下でアイスリホッケーに耽る青年男女が澤山ある。

滿蒙幾萬方哩の地も、鐵道の外には路らしい街道もなく、牛馬車輛を通ずる橋一つさへない。そこで結氷期を待つて交通運搬の活躍が始る。何千萬噸と稱する大豆その他の穀類が、或は橈、或は八頭曳の荷馬車によつて、北から南へと運ばれる。湖水の上でも、大河の上でも、個人の畑の上でも、勝手次第に往來する。それは盛んなものだ。

松花江 黒龍江の一大支流で朝鮮境の白頭山麓に發する、長さ約一八〇〇軒。
遼河 南滿洲にある大河、熱河に源を發し營口の南で海に注ぐ、長さ約一六〇〇軒。

○突如
萌え出で



結氷せらる松花江

松花江遼河及び鴨綠江を滑る橇の輸送に至つては、確かに滿洲獨特の運搬法である。松花江の如く一千軒に餘る長い河の上を這つて、特産物を輸送する荷馬車隊のためには、四十軒か六十軒毎に臨時の宿屋が氷の上に開設される。暖國人の想像もつかない事柄であらう。

四月の中旬になると、突如一夜にして地上に綠草が萌え出で、次いで堇や蒲公英が咲

梁の元帝 名は釋、支那六朝時代の梁の皇帝、在位西曆五三—五五。
○四散する

く、土筆が芽を出す。同時に楊柳の枝が青くなる。「柳絮春雪を飄して、荷珠水銀を漾たぎはす」とは、梁の元帝の名吟として後世に傳はつてゐるが、楊柳の花の翩々として四散し、地に積つて雪かと思はれる美しい風景は、滿洲でないと見られない。

梅は盆栽以外にはない。春の魁に咲く花は、杏と李である。梅花より濃艶であるが、惜しいかな馥郁ふいくたる梅花の香を缺く。杏李の花の散らない間に、梨林檎次は櫻、最後は桃と、百花爛漫、草も木も一時に花が開く。殊に美しいのは、藤と胡藤の花盛りである。胡藤と言ふのは、アカシヤを詩的に和譯した名前、偽槐にせえんじゆのことである。五月

○濃艶

○爛漫
胡藤



○移植する

ライラック
ちんちようげ。



○艶麗
○俄然

の初旬に満開となる。花には純白があり、淡紅があり、又淡青があり、ゴールドチェーンと言つて黄金色のものもある。初は露西亞人が滿洲に移植したもので、旅順や大連の街路の竝木に多い。櫻と藤は、大和男子が母國を偲ぶために、第二の故郷へ日本から輸入した、懐かしい憧れの花である。この他、石榴、牡丹、芍薬、野生のライラックなどの美しさに至つては、日本の花も、到底及ばないほどの艶麗さを見せてゐる。滿洲は決して荒地ではない。かくて南滿洲の春は、昨日まで氷に鎖された天地が、俄然として百花爛漫、あらゆる禽鳥の囀る光景に一變する。鶯も、雲雀も、杜鵑も、何もかもけたましく囀り、恰も小鳥

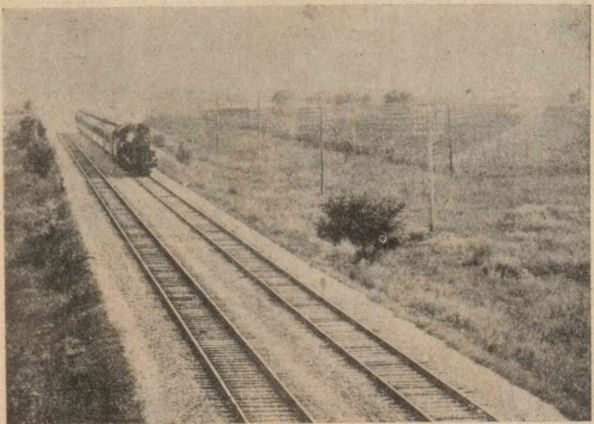
松葉牡丹



粧ひ。

哈爾濱
滿洲帝國濱江省にある北滿第一の大都會。

屋の前に佇むやうな感じがする。北滿になると、春も秋もない。冬から夏へ、夏から冬へ一足跳びである。松葉牡丹が、地上に絨緞の如くに彩られ、玫瑰と呼ぶ紅白の野薔薇が、垣根に新装を粧ひ、野に勿忘草や、茜草や、僅かに三四寸の豆燕子花などが咲き亂れる頃は、早くも夏である。哈爾濱から北滿鐵道の沿線へかけては、漸く新緑になつたかと思ふと、五月の中旬には、既に氣温が三十



滿洲の曠野

〇一躍して

二度近くに昇り、毛衣を捨てるや否や、一躍して白服に白靴の世界と變る。

〇乾燥する



何と言つても滿洲の新緑は美しい。氣候の乾燥するせゐであらう、各種の楊柳・樺・楡はもとより、蘇生した松柏の葉までが、鶯の羽のやうに美しい挽茶色に彩られる。洋畫家の憧れるのも決して無理はない。

〇直射

暑氣の盛んな頃になつて、四十三度以上の高温に昇ると、汗はどしどし蒸發して、身に纏ふ衣のびしよ濡れになると言ふやうなことはなく、皮膚もさらさらして粘り著かない。だが、日光の直射は、焦げつくばかりに強烈である。



〔筆助郎三田岡〕

景風國洲滿

○青磁色
メソボミタヤ
チタリス、ユーフラ
テス河の流域地方。

震へる
冷える

夏の朝は、四時の時計の音を聴くと、東の空が早くも白む。そして夜は八時近くまで明るい。夜の空のすがすがしさと、星の近くて大きいのと、大空に湿気がないのと、天は恰も青磁色をなしてゐる。六千年の昔に、メソボタミヤで天文学の發達した理由が、滿蒙の夏の夜の大空を眺めて、いかにもと理解される。

遠く海を離れてゐる大陸の氣候は、日本人に思ひもよらない變化が多い。たとへば、北滿地方で日中は四十三度にも近い酷暑の夏の夜が、眞夜中の二時になると、毛皮の外套を羽織つて、それでも震へるほどの寒さに冷えることもある。また地に置く露の夥しきことを見ては、雨

○繁茂する

降らぬ蒙古の沙漠に雜草の繁茂する理由も成程と頷かれる。

○入梅

一年に一回、七月の下旬から八月の中旬まで、ちやうど一箇月ほど雨が續く。日本の入梅のやうに、連日びしよびしよ降るのではない。豪雨とはかゝる雨を言ふのかと思はれるほど、勇壯極りなく、恰も空一面の大きい盪の水を一度にひつくり返したやうな勢で落ちるのである。息づく隙もないくらゐの大降雨で、市中の道路は忽ち河と化し、渾河、太子河のやうな巨大な河も一時に氾濫する。滿洲で、平常は一滴の水さへも見ない砂原の河床の上に、長いくゝ鐵橋が架けてあるのは、このためである。だが、

渾河

南滿洲の河、遼河の一大支流。

太子河

滿洲帝國奉天省にある遼河の支流。

○氾濫する

○青天白日

幸にかゝる豪雨も二日とは續かない。忽ち降り忽ち青天白日となる。まことに男らし

○築造する

○上水

○黃塵萬丈



滿洲國風景

い雨である。我が關東州租借地では、右の一年一回の雨を一滴も逃すまいと、各處の山間溪谷に、大規模の堰堤を築造して、幾つとなく貯水池を設けてゐるが、既に百萬の人口を支へるだけの上水の設備が成つてゐる。

四季を通じて、滿洲の秋は最上の好季節である。春のやうに黃塵萬丈の苦しみもなく、

○天高く馬肥ゆ

事實に於いて天は高く馬は肥え、大空には一點の白雲を見ず、中秋の満月を賞するには持つて來いの上、天氣が續く。だが、惜しいかな、その良季の秋の日はまことに短い。北滿洲に行くと、秋は僅かに二週間ぐらゐで、忽ち煖爐に親しむ世の中となる。しかし朝鮮に近い安奉線沿道の深山幽谷の秋の紅葉は燃ゆる火焰のやうに美しい。萩は秋木と呼ぶやうに床柱になるくらゐの大木もある。女郎花も人間の背丈ぐらゐに高い。桔梗、撫子の花の濃艶華麗に至つては、到底濕つばい日本の花の比ではないと思はれる。

(新滿洲國寫眞大觀)

○深山幽谷

女郎花



撫子



一九 今

市島 春城

市島春城
早稻田大學名譽理事
名は謙吉、新潟縣の
人、萬延元年生。

○賢 哲

○百代の師

○萬世の範

○金 言

○ヒ首肺肝を穿つ

○回 顧

○假 設

○代謝する
須臾

私はいくら字書を繙いて見ても、「今」といふ字より、より以上の力強い字を發見する事が出來ない。古來の賢哲、能く百代の師たり、萬世の範たる金言を遺したと言つても、「今」といふ語以上に力強い語を案出した者はない。正にこれヒ首肺肝を穿つの語である。人生唯「今」あるのみ。昨日は去れる「今」であり、明日は來らんとする「今」である。回顧は過去つた事に對するものであり、豫想は假設であつて、我等にあるものは、唯「今」のみである。日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まない。そし

○刻一刻

て刻一刻推移して行く「今」こそ宇宙の本體である。

○髓の底

これを我等の日常に見るも、「今」といふ瞬間程大切な時はない。事の成るのも敗れるのも「今」にある。この瞬間こそ髓の底までも振ひ起す力がある。「今」の外に

○既往

既往と未來とがあるかに見えるが、畢竟既往は「今」の葬られた殘骸であり、未來は「今」のまだ生まれない陰影であつて、其所には何物もない。既に葬られた既往を語るのは死兒の年を數へる様なものであり、まだ生まれない來年を語れば、鬼が笑ふと言はれてゐる。既往は追ふべくもなく、未來は期し難い。唯根強く迫り來る力は「今」といふ一瞬にあるのだ。既往に善なるもの、偉なるもの

○死兒の年を數へる

求めよう

があつたとしても、それはその當時の「今」に於いて成つたものだ。更に再び善なるもの、偉なるものを求めようと欲したならば、「今」これを爲す外はない。

○天地不息

今日しなくても明日あると言ふが如きは、天地不息の大道に背くものである。これを未來に期すと言ふ如きは、永へにこれを失ふと言ふに同じである。特に未來といふ別境地の存するのではない。「今」——現在の推移……これやがて未來である。未來に期すと言ふのは、畢竟薄志弱行者の遁辭に過ぎぬ。未來などいふ空虛を假定するのは愚である。何ぞ直ちに起つて今これを爲さざる。期し難い假定に遁れるのは、その優柔怯懦を自白

○薄志弱行者
○遁辭

○優柔怯懦
○自白する

○斷として

○傾注する

○競争場裡

○果斷

○渾身
千宗旦
父宗淳に茶道を受け、これを善くした。號は元伯又は元叔、萬治元年(三三〇)歿、年八十一。

するものでなくて何であらう。

故に私は全力を「今」の一字に注ぎ、斷として「今」の一瞬を守る。一人の生涯、一國の運命、唯「今」に全力を傾注するに於いて、初めて大成が期し得られるのである。「今」を外にして競争場裡に立つ事は難い。闘は「今」である。勝敗は「今」の一瞬にある。「時は今」と叫ぶ時、其所に果斷の決心があり、剛健の意氣があり、直截の邁進があり、奮闘の努力があり、その間一毫の惰容を赦さぬ。かくして全力の發動となり、渾身の熱血となり、精神一到して大事が成るのである。私は一意「今」を禮讚する。

私は「今」といふに因んで、茶人千宗旦の一遺事を語ら

語らう。

うと思ふ。

大徳寺
今京都市上京區紫野にある、臨濟宗大徳寺派の本山。

清巖和尚
大徳寺の住僧、近江の人、書畫を善くした、寛文元年(三三三)歿、年七十四。

○普請

○落成

問うた

宗旦が新に茶室を建てたをり、豫て別懇の大徳寺の名僧清巖和尚が多分普請も落成に及んだであらうと尋ねて來た。宗旦は悦んで迎へ、「普請は漸く成つた。どうか庵號を考へて下さい。」と言つた。清巖は、「いかさま尤ものことだ。しかし、何ぞ好みはないか。」と問うた。宗旦は暫く考へ、「古語に『懈怠比丘期明日』とあるが、いかにも面白く思ふ。」と言ふと、清巖はうちうなづき、「成程面白い。人間の生涯は明日も知れぬ事だから、庵號を『今日庵』とされてはどうか。それでよければ額字は揮毫しよう。」と言ふと、宗旦はひどく悦んだ。さて種々の

○揮毫する

○倉卒

物語に時も移つたので、清巖が暇乞して去らうとすると、宗旦は引留め、「今此所で額字の御揮毫を。」と求めた。すると和尚、「いや、それは餘りに倉卒。追つて認めて進じ申さう。」と言ふのを、宗旦、「然様にては今日庵の意にかなはず。只今此所ですぐお書き下されてこそ今日庵だ。」と言ふと、清巖も尤も至極と筆紙を求めたが、即座に唐紙や筆を辨じかねた。紙は僅かに障子の張残りを見出したけれど、筆のないのに當惑した。をりから傍にゐた妻女が眉掃を取出し、「こんな物で間に合ひますなら。」と言ふに任せ、清巖は立所に「今日庵」の三字を書いた。これが千家に名高い額面である。

○即座

○當惑する

出掛ける

○趣向

○感に入る

清巖が揮毫を果して歸院すると、程なく宗旦から使があつて、「茶を進じたう御座いますから、只今すぐお出を願ふ。」とあつた。清巖は不審を抱き、つい今まで話してゐて、そのをり何のさたもなかつたのに、妙な事だと思ひながら、直ちに出掛けると、先刻書いた額面は、針で留めて壁に掲げてあつて、宗旦は茶室開の茶を點てた。その日を越さず即日茶をふるまつた所に、宗旦の趣向があるの
で、今日庵といふ以上は、かくなければならぬと、清巖も感に入つたとの事である。

(春城筆話)

藤原咲平
氣象學者、理學博士、
中央氣象臺技師、長
野縣の人、明治十八
年生。
ツェッペリン飛行船
獨逸ツェッペリン伯
の研究なる飛行船。
マンチェスター
イギリスの西岸リガ
アブールに近い工業
都市。
シチー
商業繁華な街。
○防禦
○抵抗

○豫報

二〇 戦争と天候

藤原咲平

千九百十七年十月十九日、十一隻のツェッペリン飛行船は夜にまぎれてロンドン・マンチェスターその他の英國の都市を襲ひました。その中九隻がロンドンに達し、一隻はシチーの眞上を通りました。當時ロンドンには空中防禦の準備少く、何等の抵抗もなし得なかつたので、可なりの損害を與へられました。

ところが此の飛行船は、歸航する時風の變つたことに氣が付きませんでした。出發の際の豫報では、この時上層では北又は北西の風毎秒五米内外といふ見込でした

○下界

が、英國の南西海上にドイツ氣象家の氣づかなかつた低氣壓が現れたために、實際は上空で毎秒北二十米の風が吹いてゐました。その爲に船隊は翌朝オランダの上空位と思ふ處へ差懸り、雲霧で下界が明らかでないので、これを見定める爲に低空に降りました所、非常に南に流されてをり、それが佛國陣地の上であつたからたまりません。忽ち打落されるもの、西に逃げて海上に墜落するもの、まごついて自爆するもの、機を失して擒にされるもの、または行方不明になるものなどあつて無事歸還したのは幾隻もありませんでした。

○威を振ふ

ドイツは海上は英國に任せても、空中に威を振つて聯

燃えて

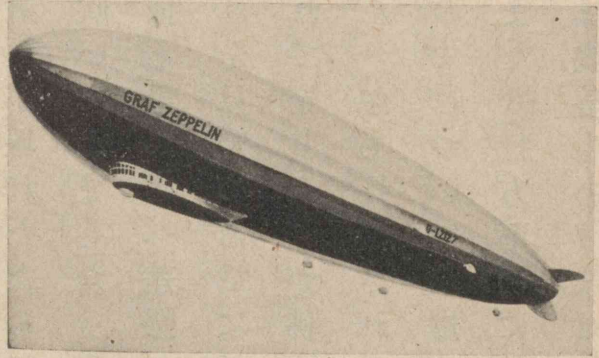
一朝にして

敗亡

銷沈

○想像に餘りある

合國を壓迫することが出来れば、戦争はどうあつても勝



船行飛ンリベッェツ

報の誤からこのやうな事に立到つたのであります。

利を得るといふ希望に燃えてゐました。この考は決して誤とは思へません。然るにドイツ人は一朝にしてその誇とし恃みとしたツェツペリン船隊の敗亡を見たのですから、如何に全國民の意氣を銷沈せしめたかは想像に餘りあることです。而してその失敗の原因は敵の力でなく天氣豫

キツチエナー元帥
(西曆八五〇—一九一)



又傳へらるゝ所によれば、その前年の六月五日英國のキツチエナー元帥は海を越えて露國に赴き、ドイツ挾撃の手筈をきめる事になりました。その渡航については海軍が全責任を負ふこととなり、海軍參謀は商議の結果、北東風が強いからスコットランドの島陰を北に出でオークニー群島の西を進むことにしたのださうです。ところが出帆後一時間と経たない中に低氣壓の中心が東に通過し、風は北西に變り、まともに吹附けて來ましたから、保護のために附隨した二隻の驅逐艦も分離して廻航するの止むなきに到り、本船は敷設水雷に觸れ、十五分間で沈没し、生存者僅かに十二名、元帥も空しく北海の藻屑

と消えたのです。

その頃英國の氣象臺は未だ海軍の信用が薄かつたといふ話ですが、この時の低氣壓の如きは最も單純なもので、少し氣象の常識と經驗のある者ならば必ず誤なく経過を豫報し得る筈のものでした。天候についての海員の自負の爲に、あたら元帥を失つたのであります。天氣豫報だとして馬鹿にはなりません、それが非常時においては國家の存亡に關することさへあるのですから。

これを歴史に徴してもその事例は多々あります。わが元寇の役の如きはその最も著しい一例であります。又三國志で御承知の赤壁の戦の如きも全く氣象學的の

○自負
○あたら

○存亡

○多々

赤壁の戦
魏の曹操と吳の周瑜との戦。

曹操
魏の王。
荊州
支那の湖北省にある。
江陵
荊州府治のあつた處、今の沙市。



吳
主は孫權。

○通曉する

戦争であります。初め曹操は八十萬の大軍を率ゐ、荊州を破り、江陵を陥れ、大江に臨んで吳を壓しました。が、北兵は水に慣れず、大江を渡ることが出来ませんので、茲に兵船を鎖でつなぎ、いはゆる連環として風波にも潮の干満にも動搖を少くしたのです。魏の謀將は兵船を連環すると、火攻にあへば防禦の途が無いと恐れましたが、時しも冬のなかばで季節風が卓越し、北西風のみ吹いてゐましたので、曹操は東南風さへなければ如何なる敵と雖も火攻を施す術がなからうと論じて、謀將等を服せしめました。曹操は北國の産で、此の邊の氣候にさまで通曉しては居りません。ところが圖らずも東南の風が起りま

○手ぐすねひく

○奇勝を博す

孔明
諸葛孔明、蜀漢の忠臣、この時は吳と聯合して魏と戦つたのである。
○眞偽

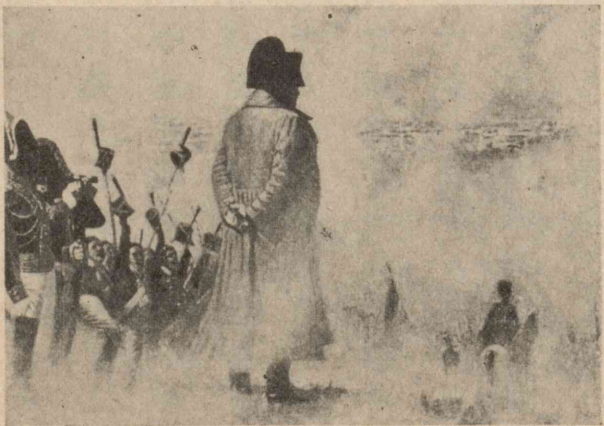


孔明風を祈る

した。東南方はすなはち吳の陣です。周瑜はかねてこの風の起るべきを知り、手ぐすねひいて待つてゐたのですから、風の起ると共に風に随つて火船を放ち、かの赤壁の奇勝を博したのです。世に孔明が七星壇に風を祈つたと傳へます。今日私どもは毎日漢口から氣象電報を得て豫報に便してをります。が、冬の間は北西風のみ吹續くを常と致しますが、稀に低氣壓が起ると風が東南に變ります。孔明が南屏山に風を祈つたことの眞偽は私の知る所ではありません。ま

ナポレオン
フランスの皇帝。(西曆一七九一—一八二一)

さか孔明や周瑜は今日の低氣壓なる知識は持たなかつたでせうが、固より南國に成長し、この北西の季節風の季中にも臨時に東南風の起り得る事を知つてゐたに相違ありません。とにかく赤壁の大戦は氣象學の知識によつて勝敗が決せられたものと考へられます。またかのナポレオンのロシヤ遠征の失敗の如きも最も有名な一例であります。初めナポレオンは出征に際しロ



ナポレオン

モスクワ
ロシアの首都。

シヤの冬について尋ねましたところ、統計によればなほ大して寒くはなるまいといふ答でした。ところがその年は例年にない寒さで、モスクワは焼かれ、殊に大雪に遇つて散々な失敗を招きました。つまり戦に負けたのでなく天候に負けたのです。ナポレオンの過でなく統計によつて氣候を豫報しようとしたための過です。統計による豫報は何回も繰返す場合には必ずそれ相應の成績を平均上擧げることが出來ますが、一回々々の勝負に於いては必ず的中するとは申されません。それが國運を賭する戦争の場合などでは、若しその豫報がはづれたら取返しのつかぬことになります。

(雲を掴む話)

○國運を賭する

菊池 寛
小説家、帝國藝術院
會員、香川縣の人、
明治二十一年生。
平河町
江戸麹町。
良澤
前野氏。
三人
杉田玄白。
中川淳庵。
小杉玄適。
○定か

○手ほどき
ターヘルニアナト
ミア
解剖圖譜の義。蘭醫
キニルムの著。

二 蘭學事始

菊池 寛

約の如く、その翌日を初とし、四人は平河町の良澤の家に月五六回づつ相會した。

良澤を除いた三人は、オランダ文字の二十五字さへも、最初は定かには覚えてゐなかつた。良澤はさすがに長崎に留學したことがあるだけに、多少の蘭語と、章句語脈のことも少しは心得てゐたけれども、それも殆ど言ふに足りなかつた。一月ばかり經つと、彼等三人に教へることは、もう何も残つてゐなかつた。

三人の手ほどきが濟むと、四人は始めてターヘルニアナ

○茫洋

著けやうがない

トミアの書に向かつた。が開卷第一頁からたゞ茫洋として、櫓櫂のない船が大洋に乗出したやうに、何處からも手の著けやうがなく、呆れに呆れて居る外はなかつた。が二三枚めくつた所に、仰向けに伏した人體全像の圖があつた。彼等は考へた。人體内景のことは知りがたいが、表部外象のことは、その名所も一々知つて居ることであるから、圖に於ける符號と、説に於ける符號とを併せ考へることが、一番取



小杉玄 適



杉田玄白



前野良澤

唇一唇

○彷彿
○明らめる

○哄笑する

付き易いことだと思つた。

彼等は、眉・口・唇・耳・腹・踵などに附いて居る符號を文章の中に探した。そして、眉・口・唇などの言葉を一つ一つ覺えていつた。が、さうした單語だけは分かつて、前後の文句は、彼等の乏しい力では一向に解しかねた。一句一章を春の長い一日考へ明かしても、彷彿として明らめられないことが屢あつた。四人が二日の間考へ抜いてやつと解いたのは「眉とは目の上に生じたる毛なり」といふ一句だつたりした。四人は、そのたわいもない文句に哄笑しながらも、めい／＼嬉し涙が眼の裡に浸んで來るのを感じないでは居られなかつた。

巳の刻
午前十時
申の刻
午後四時

眉から目と下つて、鼻の所へ來た時に、四人は「鼻とはフルヘツヘンドせしものなり」といふ一句に突き當つてしまつてゐた。無論、完全な辭書はなかつた。たゞ良澤が長崎から持歸つた小冊子に、フルヘツヘンドの譯註があつた。それは「木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘツヘンドをなし、庭を掃除すれば、その塵聚りてフルヘツヘンドをなす」といふ文句だつた。四人はその譯註を引合はせても、解しかねた。「フルヘツヘンド！フルヘツヘンド！」四人は折々その言葉を口ずさみながら、巳の刻から申の刻まで考へ抜いた。四人は目を見合はせたまゝ、一語も交へずに考へ抜いた。申の刻を過ぎた頃

に、玄白が躍り上るやうにして、その膝頭を叩いた。

「解せ申した、解せ申した。方々、かやうで御座る。木の枝を斷り申したる迹、癒え申せば堆くなるで御座らう。塵土聚れば、これも堆くなるで御座らう。されば鼻は面中に在りて、堆起せるもので御座れば、フルヘツヘンドは『堆し』といふことで御座らうぞ」と言つた。四人は手を拍つて欣びあつた。玄白の眼には涙が光つた。彼の欣びは、連城の玉を獲たよりも勝つてゐた。

彼等は、最初難解の言葉に接する毎に丸に十文字を引いて印とした。それを轡十文字と呼んでゐた。初一年の間、どの頁にもどの頁にも、轡十文字が無數に散在した。

○解す
癒える

○堆い

連城の玉
趙の恵文王所藏の卞和の璧で秦の昭王が十五城と交易せんことを求めたといふ。

○先驅者

殖え。

が、彼等の先驅者としての勇猛精進は、すべてを征服しないではおかなかつた。一年餘を過ぎた頃には、譯語の數も殖え、章句の脈も明かになり、そして、書中の轡十文字は残り少く搔き消されてゐた。

酬い。

○先人未知

先驅者としての苦闘は、やがて先驅者だけが知る欣びで酬いられてゐた。語句の末が明かになるに随つて、次第に蔗を噉ふが如く、その中に含まれた先人未知の眞理の甘味が彼等の心に染著いて來た。彼等は、邦人未到の學問の沃土に彼等だけ足を踏入れる欣びで、會集の期日毎に、兒女子が祭見に行く心地で、夜の明けるのを待ちかねる程になつて來た。

(蘭學事始)

新井白石

名は君美、白石はその號、儒者、江戸に住む、享保十年歿、年六十九。

○御家人

三 勝重と其の妻

新井白石

天正十六年徳川殿駿河の國府に移り住ませ給ふに至りて、多くの御家人の中を擇び給ひ、板倉勝重をば此處の町奉行に任せられぬ。

○任に堪へず

初め勝重を召され、この職のこと仰せ下されしが、その任に堪へざる由を固く辭し申しけれども、更に御許なく、勝重「さらば宿所に罷り歸り、妻にて候ふものと謀りてこそ、御返事を申すべけれ」と申す。徳川殿笑はせ給ひて、「さもありません、罷り歸りて相謀れ」と仰せ下さる。妻は勝重が歸るを迎へて、「悦ぶべきことありとて、告げ

こそ……べけれ

○ほくそゑむ

○こたび

○おこと

○あなあさまし

や…べき

○じ

知らする人あり。いかなる幸か候。」といひけるに、勝重ものをもいはず、ほくそゑみて、衣裳ぬぎ棄て座になほり、妻にうち向かひ、「さればけふ召されしこと、餘の儀にあらず。こたび御座所を移さるゝに依りて、かの町の奉行たるべき由を仰せ下さる。いかにもかなふべからざる旨を辭し申せど、御許なし。さらばわが家に歸り、妻に謀り候はんと申して罷り歸りぬ。さておことはいかに思ふ。」といふ。妻はおほいに驚きて、「あなあさまし。わたくし事などならば、夫婦謀るといふことこそあれ。公にてかゝることやのたまふべき。ましてこれは仰せ下さるゝところなり。殊にその職に堪ふ堪へじは、御心に

いかで…べき

○苞苴

○賄賂

こそあるべけれ。みづからいかで知り候ふべき。」といへば、勝重「いや、我この職に堪ふ堪へじは、わが心一つのみにあらず、御身の心によることにてはべるぞ。まづ心を鎮めてよく聽き給へ。古より今に至り、異國にも本朝にも奉行頭人などといはるゝものの、その身を失ひ、その家を亡さぬは稀なり。或は内縁につきて、訴を斷ること公ならず。或は賄賂に因りて、理を判つこと私多し。これ等の災は婦人より起るところあり。我若しこの職奉らん後は、親しき人の言寄らんことなりとも、訴訟のこゝと執り給ふまじきか。僅かの贈物參らせて候ふことありとも、苞苴のものを受けたまふまじきか。これ等のこと

○不思議

を初として、おことは勝重の身の上、いかなる不思議のことありとも、差出でもものたまふまじき由、固く誓ひ給はざらんには、勝重この職に任ずることは、いかにもかなふべからず。さればこそ、御身とはかるべしとは申したれ」といふ。妻つくづくうち聽きて、「誠にのためふところ理にこそはべれ。みづからはいかなる誓をも立てなんとく参りて、畏まらせたまへ」といふ。勝重大いに悦びて、神にかけ、佛にかけて、堅き誓たてさせて、「この上は思ひ置くことなし。さらば参らん」とて、衣裳ひきつくろひて出づ。袴の後腰をもぢりて著たり。妻うしろざまに見、「袴のうしろ悪しく候」といひて、立寄りて直さん

こ。そ。は。べ。れ。

○衣裳ひきつくろふ

○聞きもあへず

とす。勝重聞きもあへず。「さればこそ、わが妻に謀らんと申ししは過たざりけれ。勝重が身の上のこといかなる不思議ありとも、差出でもものいはじと誓ひしは、今のほどぞかし。早くも忘れ給へりな。この定ならんには、勝重職承ることかなふべからず」とて、また衣裳ぬぎ捨てんとす。妻大いに驚き悔いて、さまざまの怠状まゐらす。「さらばその言葉いつまでも忘れたまふな」といひて、御前に参る。徳川殿「いかに。汝が妻は何といひし。」と仰せければ、「妻にて候ふものが、愼みて承れと申しはべる。」と申す。「さこそはあらめ」とて、大いに笑はせ給ひしとなり。

○……な
○此の定

○怠状

(藩翰譜)

幸田露伴

文學者、文學博士、前
京都帝國大學講師、
帝國學士院會員、帝
國藝術院會員、文化
勳章受領者、名は成
行、東京の人、慶應
三年生。

二三 散 亂 心

幸 田 露 伴

○動 搖

追うて

○忌 む

○功 業

○思 考 せ り

心の一處に注ぐ能はずして、動搖定り無きを散亂心といふ。例へば書を讀むに當つて、一心紙上にあること能はず、或は鳥の聲を耳にするに因り、心直ちに鳥のあたりを指して馳せ去り、或は車の窓前を過ぐるによつて、心また車を追うて去るが如し。これを散亂心を以て事を爲すとはいふなり。

古の人はこの散亂心を以て事をなすを忌むこと甚だしく、學問にせよ、功業にせよ、爲して成らざる事あるは、大抵この散亂心を以て事に當るが故なりとまで思考せり

○おぼし

とおぼし。

○覺束なかるべし

○推 考

○演 劇

○惹 起 す
○茫 然
○自 失 す

如何にも散亂心を以て事を爲して、能く成さんことは、眞に覺束なかるべし。散亂心を以て、事を爲して成す能はざるの實例は算術を學ぶに當つて何人も明かに認むるを得べし。推考の力を要する算術上の問題に對して、若し心を其の問題に專注する能はず、徒に昨日見しところの演劇の光景を想像し、若しくは今夜某處に於いて觀んとするところの幻燈を想像し、若しくは自動車に乘りて走る愉快を想像しなどせんには、推考の力はこれが爲に鈍りて、腦中の散亂を惹起し、結局茫然として自失するに至るべし。

○聰明
○絶倫

見え。

○八人藝

されば算術上の問題に對してのみならず、如何なる場合にて、散亂心を以て事を爲して能くすべからざるは、定りたる事なり。世には聰明絶倫の人ありて、一時に多くの人の口々に訟ふるを聞き得、また手をもて畫をなしながら、心には詩を作り得るなどの人も無きにあらず。かゝる人々の歴史にも見え、眼のあたりにも見る事なれば、散亂心を以て事を爲すも差支なかるべしといふ疑あらん。されど實は八人藝めきたることを爲し得たりとて、毫も尙ぶに足らず。俗人は驚きて偉とこそなせ、識者はいかで偉なりとせん。たま〜左手に圓を畫き、右手に方を畫くが如きことを能くする人も無きにあらね

○多とする

○例外に屬す

ニュートン
英國の物理學者。(一
六四一—七七)

○不斷心
龍樹菩薩
印度の佛敎家。西曆
二・三世紀頃の人。

○形容す

○凌ぐ

ど、假令實に之を能くすとも、多とするに足らざるのみならず、事も例外に屬すれば、常人の學んで之を能くすべきにあらず。

ニュートンは偉人なり。されど、人の「如何にして君は引力につきての大發明をなし給ひたる。」と問へるに答へて、「我は不斷心によつて」と答へたり。不斷心とは散亂心の反對なるべし。龍樹菩薩は大賢なり。されど「散亂の心は、風中の燈火の如し、明かなりと雖も物を照らす能はず。」と説けり。まことに風の中の燈火とは巧に散亂心の働を形容せるものかな。

聰明の人や、もすれば、中年にして愚鈍の人に凌がる

○餘裕
○勢ひ

○因縁
○神情

○頑癖

○專心無適

○必せり

る事あるは、屢々世人の眼にするところなるが、予の實驗にては、其の原因、大抵は聰明の人の散亂心を以て事に當るによつて、結局敗者の地位に立つに至るが如し。蓋し聰明餘りあれば心に餘裕あり。心餘裕あれば勢ひ散亂動搖せんとす。聰明の青年、書を讀めば書甚だ讀み易く、算をなせば算甚だなし易し。是に於いて因縁の去來し、神情の馳せ逸するにまかせて、一心散亂動搖し、日を累ね月を積みて終に頑癖をなすに至る。散亂心を以て事に處し、物に接するの習をなすに至れば、聰明また聰明ならず、風中の燈火甚だ力無く、愚鈍の人の專心無適にして、物を處し、物に接するの習をなせる者に勝つ能はざるや必せ

○天資
○下風に立つ

○驕慢心

○衰耗す

○素地

り。
天資甚だ高きもの、終に凡庸の人の下風に立つに至る、誠に惜しむべきにあらずや。聰明の恃むべからざるは、昔人もまた多くこれを言へり。散亂心の戒めざるべからざるは、驕慢心の戒めざるべからざるより甚だし。人の聰明は四十歳五十歳に至つて必ず衰耗すべきものなれば、聰明未だ衰へざるに及んで、一心散亂の悪習をなすこと無く、而して、人々自己が爲さんと欲するの業をなすの素地をつくるべきなり。

(露伴叢書)

二四 山陽の感激

南條文雄

南條文雄、
佛教學者、文學博士、
福井縣の人、昭和二
年歿、年七十九。

山國谷

大分縣にある山國川
の溪谷、耶馬溪はそ
の中流以上をいふ。

大含

江戸時代の畫僧、豐
後國の人、嘉永三年
(一五〇)歿、年七十八。

○文人・墨客

頼山陽

江戸時代の儒者、詩
人、名は襄、通稱は
久太郎、安藝國の人、
天保三年(一八三二)歿、
年五十三。

法海

眞宗の高僧、號は橋
州、肥後國の人、天
保五年(一八三四)歿、年
六十七。

○遊歴

○紹介

豊前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職
大含は雲華と號し、文學を好み、書畫を能くし、廣く文人・墨
客と交り、別して頼山陽とは無二の親友であつた。山陽
が山國谷の景勝を探つたのは雲華上人の手引であつた。
山陽が「耶馬の溪山は天下に無し。」と激賞してから、山
國谷は耶馬溪として天下に著聞するに至つたのである。
當時、肥後國八代の光徳寺に、易行院法海といふ學徳共
に高い眞宗の僧があつた。山陽は遊歴の途次、豫ねて雲
華上人から得た紹介をもつて、遙々と法海師を尋ね行き、

慕うて

○端坐する

○やをら

楠公

楠木正成

○慇懃

○一瞥を與へる



頼山陽

「頼久太郎、老師の高名を慕うてお尋ね申した。お取次
をお願ひ申す。」と申し入れた。折柄机の前に端坐して
讀經してゐた老師は、やを
ら起つて山陽に面會した。
山陽は初見の挨拶をすま
せてから、自分の書いた楠
公傳の稿本をその懷から
取出した。さうして慇懃
に「老師の御批評を。」と
言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へた儘で、手
に取らうともしなかつた。さうして靜かに口を切つた。

藝州
安藝國。

○歸省する

○安 否

○御邊

○電の如く

忠臣は云々

忠臣ヲ求ムルニハ必
ズ孝子ノ門ニ於テス。

(後漢書)

○金 言

○大それた
會ひたうない。

「この頃噂に聞けば藝州の儒者で頼久太郎とやらいふ者、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間唯の一度も歸省して親の安否を尋ねようとはせず、さうして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊のこととてござつたか。」

この時、法海師の鋭い眼光は、山陽の面上を電の如く射た。山陽は我知らず面を伏せた。法海師は更に語を繼いで、「『忠臣は必ず孝子の門に出づ。』とは古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者が忠臣の傳を書くとは大それた事ではないか。楠公の靈若し知るあらば、果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。」

老師はかく言ふや否や、ずつと起つて元の座に歸り、靜かに讀經すること初の如くであつた。

程經てやつと頭を擧げた山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣がついた。が、今は取りつく島もない。老師の前に黙禮して寺門を出た。

「さすが一宗の學頭、偉い和尚だ。」これが當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽の、腹の底から搾り出された感歎の辭であつた。

山陽はそれから歸つて雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何にも我が意を得たといはんばかりに、莞爾として言つた。

○取りつく島

○黙禮

○豪快
○感歎

○一部始終

○我が意を得た
○莞爾

陽明學
明の大儒王陽明の唱へた學說、知行合一を第一とする。
○知行合一

夏日の日
趙衰ハ冬日ノ日ナリ、趙盾ハ夏日ノ日ナリ。(左傳)
註に曰く「冬日ハ愛スベク、夏日ハ畏ルベシ」と。
○發足する

○美談
○虚心

「さうか。それはよく言つてくれた。貴公は豫ねて陽明學をやつてゐるではないか。知行合一、今こそそれを實行すべき時である。」
山陽は覺えず立ち上つて、「法海師は夏日の日で、上人は冬日の日だ。」といふや否や、早々行李を整へ、その翌日未明に發足して、老母の膝下に歸省すべく安藝國へと急いだ。
山陽はその後年々歸省して老母を慰め、又これを京都に迎へ、吉野や伊勢にお供して孝養を盡くした。山陽がその後至孝の子として數々の美談を遺したのも、畢竟兩師の言を虚心に受け入れた爲である。
(修養錄)

高須芳次郎
史論家、號は梅溪、大阪市の人、明治十三年生。

華岳寺
兵庫縣赤穂町にある曹洞宗の寺。藩主淺野氏三代の墓所。
紅毛人
西洋人のこと。

○快諾
○懇望する

二五 眞の偉人

高須芳次郎

頃は明治九年のことである。

或夏のすがくしい朝、突然赤穂の華岳寺を訪うた一人の紅毛人がある。住職蓬仙和尚に一葉の名刺を差出して、

「私は義士諸君の寶物を拜見に伺ひました。何卒、この事を御快諾下さい。」

と丁寧に懇望した。その名刺には、かう記されてある。

神奈川縣裁判所雇

モズロヘエル

○篤志

○縱覽

○謝絶する

○平生

○誤解

之で知られるやうに、紅毛人はフランス人だつた。當時は開港してまだ間がなく、且つ外人取扱については、いろいろ面倒な點があるので、住職はその篤志を喜んだが、やむなく縱覽は謝絶した。が、モズロベエルは熱心を面に現して、容易に立ち去らうとしない。彼は一語々々に力を入れて、かう言つた、

「自分は、世界無二の偉人大石殿を平生崇拜してゐるので、わざわざ、此處まで尋ねて來たのです。是非私の志を酌んで、大石殿の遺物を拜見させて下さい。」これを聞いて、蓬仙和尚はその熱意を察しないのではないが、世間の誤解を受けても困るので、再び斷つた。す

○願ひしよう
○遺憾千萬

○感嘆する



大石良雄像

るとモズロベエルは、「では、どうも致し方がない。縣廳の方へ願ひしよう。それにしても、くれぐれも遺憾千萬である。」といひ、すごすご立去らうとした。この言葉に蓬仙も覺えず心を動かし、急に決心して彼を書院に請じた。そして内藏助の遺物を一々見せると、モズロベエルは頻りに感嘆して、雙頬に涙さへ浮かべ、喜びに堪へない様子である。かくして彼は正午近くまでゐたが、その時の會話は次

○開闢以來

○遺品
○喚鐘

のやうであつたといはれてゐる。

「世界に偉人は多い。その中でも、大石殿は開闢以來の第一人である。自分はその遺品喚鐘を得て珍重してゐる。」

「が、それは偽物ではなからうか。」

「否、確かな物と思ふ。」

「貴下はそれを玩物視するか、忠臣の遺品として尊重さるゝか。」

「自分は忠臣の遺品として尊重し、平生の志操に資したい。」

「貴下の御話は、通り一遍のお世辭のやうに思ふがど

○志操

○通り一遍
○お世辭

○玩物視する

ナポレオン一世
フランス皇帝、西曆一八二一歿、年五十二。

孔明
支那蜀漢の丞相、西曆二三四四年陣病歿、年五十四。

文天祥
支那宋末の忠臣、西曆一二八二獄死、年四十七。

豊太閤
豊臣秀吉のこと。

○第一人
○相場
○一躍
○末路

うか。貴國には有名な偉人ナポレオン一世がゐる。また支那には孔明、文天祥あり、日本にも豊太閤がある。然るにナポレオンその他の人々以上に、大石氏を開闢以來の第一人といはるゝのは、單に表面だけの世辭ではないか。」

「否、貴師の申されたものは、眞の偉人といひ難い點がある。第一、ナポレオンは多慾です。また一種の相場師で、相場が當れば一躍大富豪ともなるが、當らなければ悲惨な末路を遂げる。孔明も、旨く當れば天下の政權を握つたらうが、當らずして五丈原に死した。文天祥とても同一である。眞の偉人は、智・仁・勇の三徳を備

○手足の如く

○怯情

○智略

○復讐
全うする

○賞揚する

○語氣を強める

○義舉

ハラキリ
切腹のこと。

へねばならぬ。大石殿は、仁者である。その同志のものが彼を仰いで手足の如く働いた。それは仁の徳を持つからです。大石殿は少しも怯情でなく、大勇を持ち、智略にも長け、倍數の敵を破つて四十七士討死するもの一人もなく立派に目的を遂げた。且つ二年に亘つて一同に復讐計劃の祕密を守らせ、終りを全うしたのは、眞の偉人である。」

モズロヘエルは、かう述べて内藏助を賞揚した。彼は尙一段語氣を強めて、かういつてゐる。
「大石殿は、かく立派に義舉を全うせられたが、そこに四十七士を待つてゐたのは、ハラキリです。權勢でも

○即興

○傾倒する

なく、利得でもない。この點、大石殿は無私の人無慾の人で神様に近い。日本國民は何故この立派な人を神様として祭らないのか。」

モズロヘエルはかう熱心にいつてから、即興の短歌一首を日本文字で書いて蓬仙に示したのである。

大石をおもへば、我が國のナポレオンの名までも
かげにくもるかな

茂津

歌はすぐれてをらぬけれども、モズロヘエルの内藏助に傾倒することのいかに深かつたかは、蓬仙の心を動かした。二人は固く握手した。モズロヘエルは、名殘惜しげに華岳寺を立去つたのである。

(隨筆赤穂浪士)

田邊尙雄
音樂研究家、東京帝國大學講師、東京の人、明治十六年生。
○左右する

二六 國歌と國民性

田邊 尙 雄

一國の音樂が、どれほどその國民に左右されるかといふことは、國歌などを見ると最も明らかに解る。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較することにもなり、またその國民の氣風・性質などを知るたよりともなる。今試みに西洋音樂の中心をなしてゐる伊・獨・佛三國について、その國歌を較べて見よう。

最初、まづフランスの國歌マルセイユ曲について考へて見ると、これには貴族的好尚に對する反抗が現れてゐて、甚だ平民的傾向を帯びてゐる。隨つて國歌の上に尊

見よう
マルセイユ曲
行けや祖國の子光榮の日ぞ來れる、我等に對して暴虐の血染の旗は擧げられたり……
○好尚

○發現

○尤なるもの

○剽悍勇猛

嚴といふものがない。その代り感情は實に遺憾なく現れてゐる。一體フランス音樂には、感情の極端な發現といふことが、一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌は實にその尤なるものであると言つてよい。この意味に於いて、マルセイユ曲は、眞にフランス人民を代表するところの國歌としてふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスと反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理性的であつて、徒に感情に走らない。隨つてその音樂も感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來頗る愛國的歌謠が多いが、その愛

ラインの守り
響く一聲雷か、劍戟
の音か、波濤の音か、
ラインに、ドイツの
ラインに、誰ぞ、此
の河の防禦者たらん
ものは、愛する祖國
よ、安堵せよ、ライ
ンの守衛は立てり、
堅固に且つ忠實に……

ドイツ人の祖國や
いづこ
ドイツ人の祖國やい
づこ、プロシヤかは
たスワヴィヤか、葡
萄の實のるラインの
岸か、鴨の泳ぐベル
チックの濱か、否々、
我が國は更に大なる
べし。
○汎ゼルマン主義

國心といふのが、また我が國やイギリス・ロシヤなどと甚
だ違つてゐる。我が國は全然皇室中心主義であつて、愛
國といふことは皇室を尊重することである。しかるに
ドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得ることを
喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。随つ
て國歌は、皇室尊崇などよりは、他國に對する威壓を以て
第一の目的としてゐる。この點がドイツ國歌の特徴で
ある。それは準國歌たる「ラインの守り」及び同じく準
國歌たる「ドイツ人の祖國やいづこ」を見ると、實に遺憾
なく汎ゼルマン主義を叫んでゐるのが解る。かやうに
ドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツ

○理性的

のものが威壓的であるのに反して、フランスのものは反
抗的である。ドイツのものが理性的であるのに反して、
フランスのものは感情的である。實にこの兩國の國歌
を見るだけで、歐洲大戰爭の光景が目に見えるやうに感
じられる。

翻つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國
歌と言へば、ローヤルマーチ・オヴ・イタリーと稱せられる
ところの軍歌的の進行曲であつて、歌ではない。これは
なか／＼面白く愉快に出來てはゐるが、尊嚴といふ感じ
は少い。あまり巧みに作り過ぎてあつて國民の眞情が
流露してゐない。これは全くこの國の歴史によるので

○眞情流露

○急激に勃興する

ある。イタリーが現今のやうに統一されて帝國となつたのは、今から僅か五十年ほど前である。茲に於いてか始めて國家的觀念といふものが急激に勃興して來て、愛國的歌謠が現れて來た。國歌たるローヤルマーチはこの時に生じたのである。ところが、それに國民の眞情が流露してゐないのは、元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歴史上の變動のために急に現れて來たものだからである。それに、彼等は當時獨立戰爭のために全國民が一致したところの元氣が即ち愛國心であると誤解してゐたやうで、國家・皇室の尊嚴といふことはその中に入つてゐない。且つ又、イタリーでは從來

獨立戰爭
西曆一八六一—一八七〇

○換言すれば

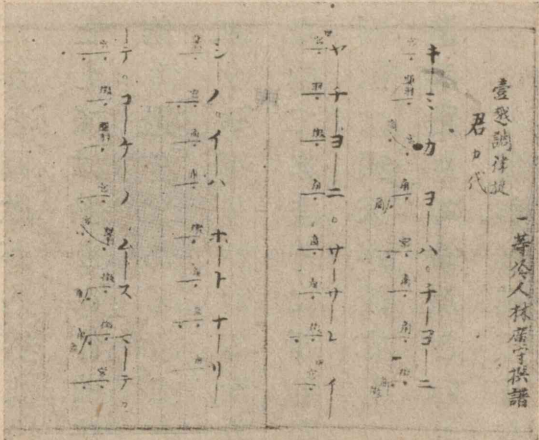
の音樂が頗る發達して、作曲法の技巧も進んでゐたものだから、國歌が内容よりも寧ろ形式に流れて了つて、國歌としては餘りに作曲法が上手過ぎてゐる。換言すれば飾り過ぎてある。これはつまり、國歌の成立の精神が、イギリス・ドイツ・ロシアなどのやうに古い根柢を持つてゐないで、あまりに新し過ぎるからであらう。イタリーの國歌は、國家が成立した時、あまりに音樂に對する知識が進み過ぎてゐたといふ缺點がある。

この點から見て、日本の國歌はどうであらうか。「君が代」は宮内省雅樂部の林廣守氏等の作曲で、比較的新しいものであるのに拘らず、イタリーとは大いにその性質

林 廣守
雅樂家、宮内省雅樂部副長、大阪の人、明治二十九年歿、年六十六。

○意匠
旋律

○標徴



君が代の代古譜 (藏部樂雅省內宮)

を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗の旭日の意匠と國歌の「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の威嚴を示す標徴となつてゐると言つてよい。

然らば、如何にして我が國にはかやうな尊嚴な國歌が生ずるに至つたかと言ふに、その成立の動機が根本に於いてイタリと全く相異なるからである。 「君が代」の作曲は、一度外國人が手を著けたけれど

○則とつて

○異様

○爾來

○屏息する

も不成功に終つた。その後、林氏等が全然古代の音樂に則とつて作つたのが現今の「君が代」である。我が國歌がこんな宮中の音樂師、しかもその老輩の手になつたと言ふのは一寸異様であるが、實はそれが我が國の大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞の大和民族の眞情を流露した音樂である。ところが、奈良朝から平安朝の初期へかけて、唐代の形式的音樂、所謂舞樂が輸入されて、爾來その盛んなるにつれて、大和民族本來の性情を具備した音樂は屏息してしまつてゐた。然るに、平安朝の中頃から唐朝が亂れ、隨つて我が國から留學生等をも送ることが

行はれるやうに

備へて

久米歌

古昔、久米部が久米舞を舞ふ時歌つた歌故にかく名づける。

久米舞

久米歌に伴ひ久米氏の舞つた勇壯な舞。

饗宴

出来なくなつたので、輸入音楽も勢力を失つてしまひ、ここに始めて唐朝からの輸入の音楽と、大和民族本来の音楽との調和が行はれるやうになり、かうして終に形式の整つた日本音楽と言ふものになつたのである。

元來、古代に於ける大和民族本来の音楽は、大陸的性質を備へてゐたもので、決して島國的のものではなかつた。神武天皇御製の久米歌に基づいた「久米舞」など、いかにも雄大且つ莊嚴で、現に宮中の饗宴に於いてこれを拜する外國の使臣は、皆その結構の偉大に驚歎するといふ事である。かやうに大和民族本来の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の與へられた音楽が所謂雅樂

○保留する

である。そして、これを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本来の性情を備へてゐて、しかも形式に於いて可なり立派なものであるのは當然なことである。こゝに於いて、我が國の國歌と諸外國の國歌と、その成立を全然異にしてゐることも、また隨つてその性質上に多大の相違を生じた理由も、明らかに知られるであらう。

(音樂通論)

聖代女子國語讀本 卷三 終

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表
昭和六年五月修正、千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不世丙並
 【一】中【、】丸主【、】之久乏乘
 【乙】乙九乞也乳亂【、】了事【三】
 二互五井【、】亡交京亭亦【、】人
 仁仇今介仕他付代令以仰仲伴任
 伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余
 佛作伸使來佳例侍供依侮侯侵便
 係促俱俊俗保俠信修俳俵倂併倉
 個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍
 傑備催働傳債傷傾懂儻儻僞僧價
 儀億儉償優【、】元兄充兆兇先光
 克兌免兒【、】入內全兩【、】八公
 六共兵具其典兼【、】冊再【、】元
 【、】冬冷涼准凌凍【、】凡【、】凶
 出【、】刀【、】刀又分切刊刑列初判別利

到制刷券刺刻則削前剛副剩割創
 劇劍劑【、】力功加劣助努効勅勅勇
 勉勸勸務勝勞募勢勸勸勸勸【、】
 包【、】化北【、】區【、】十千升午
 半卑卒卓協南博【、】占【、】印危
 却卵卷即【、】厄厘厚原厥【、】去
 參【、】及友反叔取受【、】口古句
 叫召可史右司各合吉同名后吏吐
 向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命
 和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉
 喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑【、】因四
 回因困固國園圍圖圍【、】土在
 地坂均坊坑坪垂型埋域域執培基
 堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塚增
 墨墮壁壇壓壓壤【、】土壯壹壽【、】又

夏【、】夕外多夜夢【、】大【、】大天大夫
 央失奇奉奏契契奔奢奧奪獎奮【、】女
 女奴好如妃妊安妙妨妹妻姉始姑
 姓委姦姪姪姻姻姿威娘娛娘娼娼婦
 婿媒嫁嫡嫌孃【、】子【、】子字存孝季孤
 孫學【、】宅守安宏完宗官定宜客
 宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢
 實審寫寬寶【、】寸【、】寸封射將專尉
 尊尋對導【、】小【、】小少尙【、】尤【、】就【、】
 尺尼尾尿局居屈屈屋展層履屬
 【、】山【、】山岡岩岳岸峰島峽崇崎崩
 【、】川州巡巢【、】工【、】工左巧巨差
 【、】已【、】已【、】市布帆希帝帥師席帳
 帶常帽幅幕幣【、】干【、】干平年幸幹
 【、】幻幼幾【、】床【、】床序底店府度座

庫庭庶康廉廓廢廣廳【延】延廷建
廻【升】弄弊【弋】式【弓】弓引弟
弱張強彈【彡】形彩影彰【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得從御復微
徵德徹【心】心必忌忍志忘忙忠快
念怒思怠急性怨怪怯恐恥恨恩恭
息悔悟悖患悲惟悼情惑惜惠惡惰
惱想愁愉意愚愛感慈態慕憐悞憤
憤慨慮慰慶愆憂憐憚憲憶懣憤懇
應懲懷懸戀【戈】成我戒戰戲戲
【戶】戶戾房所扇【手】手才打扱扶
批承技抑投抗折抱抵押披抽拂拍
拒拓拔拘抽招拜括拏拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛探探推揚接
提換握揮搗揮援損搖搜搗携舉撫
擇擊操擔據擬擴攝【支】支【支】收
改攻放政故敍教敏救敗敢散敬敵

敷數整【文】文【斗】斗料斜【斤】斤
斤斬新斯斷【方】方施旋族族旗
【无】既【日】日且旨早旬旭昇昌明
易昔星春昭昨是映時晚晝普景晴
晶智暇暖暗暑暮暴曆曇曜【日】曲
更書曹會替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本札朱机朽
杉材村束柿杯東松板枕林枚果枝
枯架柄某染柔查柩柱柳粟校株根
格栽桃案桐桑梅條梨械棄棋棹棟
森棺植楠業極榮構概樂樓標樞樸
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權【欠】次欲
款欺歌歡歐歡【止】止正此步武歲
歷歸【歹】死殊殉殖殘【爻】段殺殿
毀【母】母每毒【比】比【毛】毛【氏】
氏民【气】氣【水】水水永汴求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河沸油治沼

沿況泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津
洪活派流浦浪浮浴海浸消涉液淑
淚淡淨淫深混清淺添減澗澗渡測
港渴湖湧湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漢漢漫漸滑滯
潮澤激濁濃濕濟濱瀧灣【火】火灰
災炊炎炭烈無然煉煮煙照煩熱熱
燃燈燒營爆爐【爪】爪爭爲爵【父】
父【彡】兩【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犧【犬】犬犯狀狂狩狹
猛貓猶獄獨獲獵獸獻【玄】玄率
【玉】玉王玩珍珠班現球理琴瓔璣
【瓦】瓦瓶【甘】甘甚【生】生產甥
【用】用【田】田由甲申男町界畏畑
畜畝略番畫異畱當疊【足】足疎疑
【疒】疫疲疾病症痘痢療癖【火】
登發【白】白百的皆皇【皮】皮【血】

皿盆益盛盜盟盡監盤【目】目盲直
相省眉看真眠眼着睡督【矢】矢知
短【石】石砂砲破研硬硯碁碎碑確
磁磨礎【示】示社祈祕祖祝神票祭
禁禍福禦禮【禾】秀私秋科秒租稂
移稅程稚種稱稻稿穀積穗穩【穴】
穴究空突窈窵窳窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛符第筆等筋筒答
策算管箱節範築篤簡簿籍【米】米
粉粒粘粗粹粹糖糞【糸】系紀約紅
紋納純紙級紛素紡索紫累細紳紹
紺終組結絕絡給統絲絹經絲維綱
網綴綻綿緊緒線締緣編緩緯練縛
縣縫縮縱總績繁織縉繪繭練纏續
【土】缺【网】罪置署罰罵罷羅【羊】
羊美羣義【羽】羽翁翬習翼【老】老
考者【而】耐【耒】耕【耳】耳聖聞聯

聲職聽【聿】肅肇【肉】肉肖肝股肥
肩育肺胃背胎胞胴胸能脅脈脊脚
脫腐腕腦腰腸腹膜膝臆臄膺臆
【臣】臣臥臨【自】自臭【至】至致臺
【白】與興舉舊【舌】舌舍【舛】舞
【舟】舟航般舵船船艦【艮】良【色】
色【艸】芝花芽芳苑苗若苦英茂茶
草荒荷莊菊菌菓菜華萬落葉著莖
蒙蒸著蔓薄藏藝藤藥【疋】虎虐處
虛號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蟹
【血】血衆【行】行術街衝衡衛【衣】
衣表袞袋袖被裁裂裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】見規視親
覺覽觀【角】角解觸【言】言訂計討
訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞詠
試詩話話詳誇誌認誓誕誘語誠誤
說課調談請論論諸諾謀謁諮講謝

諱謹謬證識譜警譯議護譽讀變讓
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豕豚象豪豫
【貝】貝貞負財貧貨販賈賈賈賈賈
賤賦質賴購贈贊【赤】赤【走】走赴
起超越趣【足】足距跡路踊躍【身】
身【車】車軌軍軒軟軸較載輕輦輪
輯輸輿轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰農
【走】込迎近返迫迭述迷追退逃逃
逆透逐途達達遙遞遠遣適遲遲選
運過道達達遙遞遠遣適遲遲選選
遺避還邊邊【邑】邦邗邗邗邗邗邗
郵都鄉【酉】酌配酒酢酬醕醕醕醕
醫【采】釋【里】里重野量【金】金釜
針鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞
錄錢鍋鎖鎖鎖鎖鎖鎖鎖鎖鎖鎖鎖鎖
【門】門閉開開開開開開【阜】防附

降限陞院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽
 隆隊階隔隙際障隣隨險隱【雀】隻
 雀雉雅集雁雌雙雉離難【雨】雨雪
 雲零雷電需震霜霧露靈【青】青靜
 【非】非【面】面【革】革靴【音】音響

【頁】頁項順頤預頤頤頤頤頤頤
 頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤
 願頤類頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤
 食飢飲飯飾養餓餘餅館餐【首】首
 【香】香【馬】馬馳駁駟駐騰騷驅
 驗驚驛【骨】骨髓體【高】高【彭】髮

【門】闢【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉鯛
 【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄【鹵】鹽【鹿】鹿麗
 【麥】麥【麻】麻【黃】黃【黑】黑默點
 黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齋】齋【齒】齒齒
 【龍】龍【龜】龜

注意

(一)本表にない漢字は假名で書くこと。(二)固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること。(三)代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと。(四)外來語は假名で書くこと。

略字表

(百五十四字、臨時國語調査會決定)

勸勸	權權	灌灌	飲飲	觀觀	沢沢	扱扱	發發	廢廢	甬甬	獵獵	乱乱	辭辭	潜潜	實實	寫寫	宝宝	扣扣	叙叙	糸糸	様様
讖讖	駢駢	枳枳	變變	戀戀	蛮蛮	濟濟	贊贊	乏乏	徒徒	從從	縱縱	惱惱	腦腦	婦婦	氣氣	炉炉	犧犧	獻獻	画画	苗苗
莖莖	徑徑	經經	輕輕	併併	屏屏	瓶瓶	處處	抛抛	担担	胆胆	未未	麥麥	寿寿	旧旧	礼礼	称称	糸糸	欠欠	声声	台台
餅餅	研研	齊齊	齋齋	濟濟	劑劑	殘殘	鑄鑄	数数	樓樓	樂樂	菓菓	読読	統統	迎迎	万万	号号	証証	豊豊	弁弁	通通
淺淺	賤賤	錢錢	勞勞	營營	榮榮	学学	竜竜	滝滝	随随	髓髓	廉廉	聽聽	舘舘	迎迎	医医	鉄鉄	関関	双双	靈靈	余余
覺覺	拳拳	譽譽	断断	繼繼	齒齒	齡齡	應應	虚虚	戲戲	遲遲	解解	独独	触触	舘舘	体体	関関	塩塩	点点	党党	龜龜
濕濕	頭頭	窓窓	総総	属属	囑囑	為為	疊疊	撰撰	虫虫	蚕蚕	仮仮	児児	刺刺	舘舘	体体	関関	塩塩	点点	党党	龜龜
偽偽	帶帶	滯滯	参参	惨惨	兩兩	満満	励励	嘗嘗	国国	開開	口口	図図	壺壺	舘舘	体体	関関	塩塩	点点	党党	龜龜

ラ	變	有	ら	未然形につくもの	連用形につくもの	終止形につくもの	連體形につくもの	已然形につくもの
					有り	有り	有る べべかり かしかり	有れ

偽濕 帶頭 滯窓 參總 慘屬 兩屬 滿屬 爲屬
 勵覺 賞撰 國蟲 開蚤 口假 國兒 圖刺 壹刻

文語動詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	已然	命令
四段	書	カ	キ	ク	ケ	ケ	ケ
上二段	起	キ	キ	ク	ケ	ケ	キヨ
上一段	(著)	キ	キ	ケル	ケル	ケレ	キヨ
下二段	兼	ネ	ネ	ケル	ケル	ケレ	ネヨ
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケヨ
カ行變格	(來)	コ	ケ	ケル	ケル	ケレ	コヨ
サ行變格	(爲)	セ	シ	ケル	ケル	ケレ	セヨ
ナ行變格	死	ナ	ニ	ス	スル	スレ	ネ
ラ行變格	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ

口語動詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段	書	カ	キ	ク	ケ	ケ	ケ
上二段	有	ラ	リ	ル	ル	レ	レ
上一段	起	キ	キ	ケル	ケル	ケレ	キヨ
下一段	兼	ネ	ネ	ケル	ケル	ケレ	ネヨ
カ行變格	(來)	コ	ケ	ケル	ケル	ケレ	コヨ
サ行變格	(爲)	セ	シ	ケル	ケル	ケレ	セヨ

〔聖代女子國語讀本附錄〕

文語形容詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	已然
ク活用	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク	シ	シキ	シケレ

口語形容詞活用表

種類	語根	未然	連用	終止	連體	假定
ク活用	清	ク	クウ	イ	イ	ケレ
シク活用	涼	シク	シク(ウ)	シイ	シイ	シケレ

文語助動詞活用表

種類	受身	敬能	使役	時
未然	れる	せ	む	た
連用	れる	せ	む	り
終止	る	す	つ	ぬ
連體	る	する	つる	ぬる
已然	れよ	せよ	つれよ	ぬれよ
命令	れよ	せよ	つれよ	ぬれよ

用活段二下

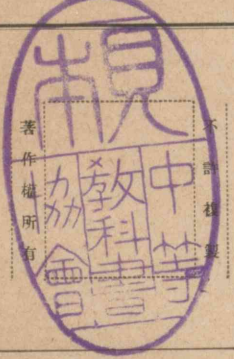
口語助動詞活用表

種類	受身	敬能	使役	希推否	時
未然	れる	せ	さ	た	た
連用	れる	せ	さ	ら	ら
終止	る	せる	さ	い	い
連體	る	せる	さ	い	い
假定	れよ	せよ	さよ	い	い
命令	れよ	せよ	さよ	い	い

用活段一下

日七十月一年三十和昭
濟定檢省部文

用科語國校學女等
用科語國校學業實



昭和十二年七月一日
昭和十二年七月五日
昭和十二年十二月十五日
昭和十二年十二月二十日
印刷
發行
訂正再版印刷
訂正再版發行

編纂者 吉澤義則

發行兼印刷者 星野敬一

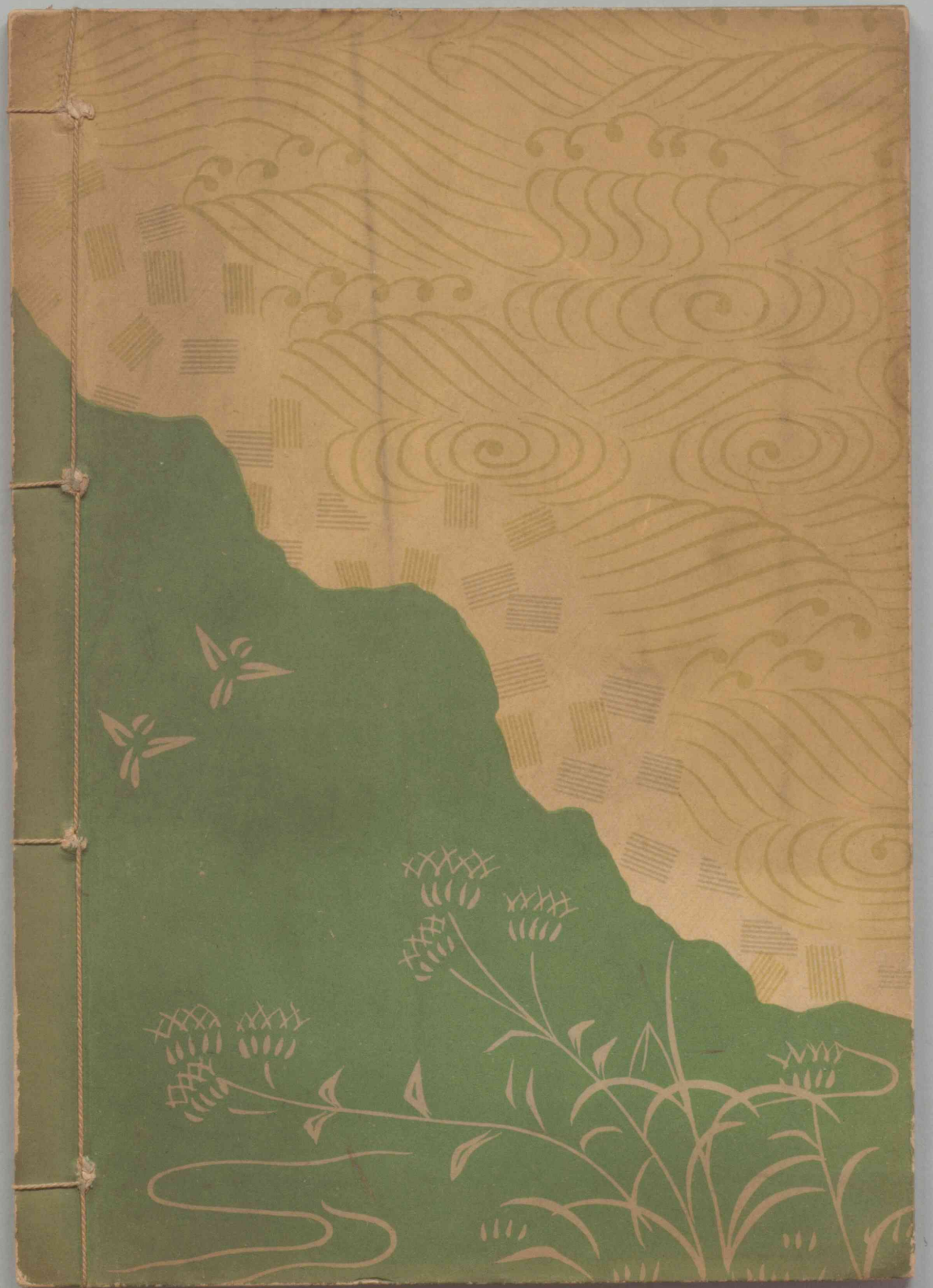
京都市上京區丸太町通堀川西入
西丸太町百七十一番地

發行所 星野書店

電話(西陣)①三三五 四三七 六九六番
振替貯金口座大阪四九九九一番

聖代女子國語讀本 全十冊

定價各卷金六拾錢



著者心血を注ぎし本書の教授
指導書は完備致して居ります
から御下命次第御贈呈申
あげます